JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS
JUNE
2023

6

特 集

現役隊員も参加のメリットがたくさん

OV会＆職種別グループで先輩隊員とつながろう

クロスロード

2023 JUN

Contents

表紙によせて

サッカーが人気のコスタリカで、フェンシングや柔道などのスポーツ系隊員たちと共に各種競技の体験イベントを開催しました。私は、野球を初めて見る子どもたちに、まずは打つ・投げる・走るといった動きを純粋に楽しんでもらうよう心がけました。「次はいつ来てくれるの」と目を輝かせる子どもたちの姿が、今も心に残っています。越智陽水さん（コスタリカ／野球／ 2019年度2次隊・愛媛県出身）

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集

6 現役隊員も参加のメリットがたくさん
OV会＆職種別グループで先輩隊員とつながろう

14 派遣国の横顔 ボリビア
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

20 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

22 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

24 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり＆アクティビティ

26 先輩隊員のシューカツ記

28 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

30 待ってます、あなたを！ ～各界からのエール

31 あの日、地球の、あの場所で。

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし

36 ウチのこだわり —OB・OGショップ

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

■国別索引

	掲載ページ
インド	4
ウガンダ	8
ガーナ	9
ガボン	26
コスタリカ	1
シリア	28
ソロモン	2
フィリピン	22
ブラジル	5
ベナン	34
ベリーズ	31
ボツワナ	9
ボリビア	16、17、18
ホンジュラス	24、36
マレーシア	10
モンゴル	11
ニジェール	7
ルワンダ	22

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	34
村落開発普及員	9
コンピュータ技術	9
土木	8
観光	22
青少年活動	2
環境教育	28
野球	1
柔道	4、26
PCインストラクター	31
音楽	36
日本語教師	5
小学校教育	18
小学校教諭	7
看護師	16、17
理学療法士	11
保育士	10
感染症・エイズ対策	24

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
埼玉県	11
千葉県	2、34
東京都	10、24
神奈川	22
富山県	5
愛知県	22
三重県	28
京都府	31
大阪府	9
兵庫県	4、16
奈良県	17
鳥取県	7
広島県	8
愛媛県	1
鹿児島県	26、36
沖縄県	18

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

小学校で行われたビブリオバトルの様子。聞き手側の子どもたちも目を輝かせて発表を聞いている

小学校の図書室整理を行った太田さん。子どもたちは早速、お目当ての絵本などを手に取った

子どもたちに伝えたいSDGs
世界の学校

ソロモンの学校図書室の整備で読書習慣の定着 子どもたちに本を通じて広く世界を知ってほしい

太田蒔子（おおたまきこ）（旧姓・服部）さん（ソロモン／青少年活動／ 2017年度4次隊・千葉県出身）

ソロモンのイザベル州教育局に赴任し、子どもたちの識字率向上のために読書習慣の定着に取り組みました。

教育局には公共の図書室がありましたが、整備されていなかったので、まずはここの整備に着手しました。すると、大勢の子どもたちが放課後に図書室を利用するようになり、その様子を見た州内の小学校の校長から、学校の図書室の整備を依頼されました。

「英語の本を寄贈してもらったが、どのように活用すればよいかわからない」と言われて学校に行くと、図書室には大量の寄贈図書が段ボール箱に詰められたまま、何カ月もの間、床に放置されていました。本の整理は、児童たちや教員、同行した教育局の職員がとても頑張ってくれたので、作業がはかどりました。

整理に続いて、「ビブリオバトル」（※）を開催しました。これは、数人の児童が自分のお気に入りの本の内容を発表して、聞いていた他の児童が誰の本を一番読みたくなったかを決めるゲームです。同行してくれた元教員の同僚は子どもたちの盛り上げ方がうまいので、一緒に進めてもらいました。

発表する子は緊張している様子で、特に低学年の子はピジン語（共通語）で話せるか不安そうでしたが、「現地語でいいよ」と言うと安心した様子。ほとんどの子が本をそのまま読むだけの発表でしたが、質問タイムにはしっかりと答えていました。子どもたちはゲームが大好きなので、聞き手側の子どもたちも真剣に聞いていましたが、一番人気の本を発表する時には大いに盛り上がっていました。本に興味を持ち、さまざまなジャンルの本に触れるきっかけになることを願っています。

現地では電気が来ていない家や学校が多く、子どもたちは自分が見聞きできる範囲の情報しか知りません。本を通じて、ソロモンの外のこと、世界の歴史や偉人の話など、広い世界を知ってほしいと祈っています。

Text＝阿部純一（本誌）　写真提供＝太田蒔子さん

※ビブリオバトル…3～5人ほどの参加者それぞれが選んだ本の内容を発表し、全員でディスカッションを行い、最後に一番読みたくなった本を投票で決める日本発祥のゲーム。面白い本に出合うことができ、発表側に回ると本を深く読み込む訓練になる。

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from India

インドの視覚障害者に柔道を指導 基礎技術の大切さを伝えています

長尾宗馬（ながおそうま）さん（インド／柔道／2021年度7次隊・兵庫県出身）

2022年3月、新型コロナウイルス感染拡大の影響による2年間の待機期間を経て、インドに派遣されました。要請内容は健常者と視覚障害者への柔道の指導です。

インドの選手を見て最初に思ったのが、基礎知識、基礎技術が全然足りていないことでした。柔道は基礎が身についてこそ、技を積み上げられるものです。インドでは指導者が足りないため、基礎がおろそかになり、力で補っているようで、レスリングのような柔道をしていました。

また、インターネットで見た派手でかっこいい技をまねする風潮もあり、力任せに無理やり投げるため、技をかけるほうも肩などのけがが多いことが気になりました。

私は以前、外務省の国際貢献プログラムでインドの選手に柔道を教えたことはありますが、障害者に指導した経験はなく、その手法もわかりませんでした。しかし、それをサポートしてくれたのは、他ならぬ健常者の生徒たちでした。日本では、健常者と障害者の指導は分けられていますが、インドでは練習する場所もコーチの数も限られているので、両者が一緒に練習することが多く、健常者が障害者のサポートをすることも心得ていたからです。

全盲の選手には、一つ一つの技の形を取り、体を触って理解してもらいました。また、弱視の選手と健常者に対しても言葉の壁があるため、自分の考え方を理解してくれる選手に、代わりに伝えてもらうようにしました。

指導を始めた頃は日本からコーチがやって来たというので、こぞって来てくれましたが、単調な基礎練習に飽きて、来なくなる子もいました。

それでも柔道が好きだからと真面目に来る子もいて、そういう子たちは半年ほどの基礎練習でレベルアップしていきました。それに触発されて、練習に飽きていた子たちもまた来るようになりました。

昨年12月に東京で行われた視覚障害者柔道の国際大会では指導したインド選手の全盲の男子が優勝、弱視の女子が準優勝。インドでは初の快挙でした。

今年3月のエジプトでの国際大会でも、優勝した選手が2度目の優勝を勝ち取りました。

選手たちの活躍は自分のことより嬉しいのですが、派遣期間の間に必ずしも選手を強くする必要はないと思っています。大切なことは、指導した選手たちが次世代のコーチになった時も、基礎技術を伝えられる基盤を築くことです。彼らの将来に期待して、長い目で見ています。

1 インドの選手たちに柔道の指導をする長尾さん
2 視覚障害者柔道の国際大会で優勝した全盲の選手（右から2人目）と準優勝した弱視の選手（左から2人目）と長尾さん（左端）

Text＝大和田美喜　写真提供＝長尾宗馬さん

from Japan

外国にルーツを持つ子どもたちの 可能性が開花するように学習支援

青木由香（あおきゆか）さん（日系／ブラジル／日本語教師／2005年度0次隊・富山県出身）

現在、生まれ育った富山県高岡市で、NPO法人アレッセ高岡（※1）の理事長を務め、外国にルーツを持つ青少年の学習支援や市民性教育（※2）などに取り組んでいます。

「支援する―支援される」といった一方的な関係を見直し、地域活性化も見据えながら多文化共生社会の実現に向けて努力を重ねていることが評価され、2022年度国際交流基金「地球市民賞」を受賞することができました。これは大変光栄なことであると同時に、活動の意義や重みを再確認する経験でもありました。

13年前にアレッセ高岡を立ち上げたのは、日系社会青年ボランティア時代の経験が土台になっています。ブラジルで日系の子どもたちに日本語や日本文化を教える中で、出稼ぎ先の日本から戻ってきた家族の子どもたちにも出会いました。しかし、その子どもたちの中には日本語の読み書きができず、また、ブラジルの学校にもなじめないというケースが少なからず見られたのです。現地の日系1世や2世の方は日本語を通した日本文化の継承や日本の教育に誇りを持っており、「今の日本の教育はどうなっているのか」と問われて、答えることができませんでした。外国にルーツを持つ子どもたちが増え続ける日本の教育現場を知りたいと考えたことが今の活動の原点です。

帰国後は故郷の高岡に戻って、外国人相談員として地元の学校に入りましたが、外国にルーツを持つ子どもたちをサポートする体制が何も整っていないことにがくぜんとしました。日本語が壁となって高校進学を諦めなければならない子が多くいるということ、そのハードルが自分の住む富山県で特に高いことにもショックを覚えました。

子どもは、自分では住む場所を決められません。やむにやまれぬ思いで2010年に立ち上げたのがアレッセ高岡です。高岡市に多いといわれるブラジルをはじめ、パキスタン、中国などにルーツを持つ青少年が日本での進学をかなえるため、週2回、基本5教科を学習しています。その支援を続ける中で、必要なのは受験対策だけでなく、進学後のフォローや居場所づくりであることにも気づきました。また、コロナ禍にオンラインでのサポートを始めたことにより、これまで通ってこられなかった遠方の生徒や小学生なども受け入れることができるようになり、活動の幅が広がっています。

3年前からは市民性教育という新しい取り組みも始めています。地域に住むすべての人が同じ「市民」として、国籍や言語を超えて地域課題等に向き合う活動です。外国人住民だけに変化を求めるのではなく、むしろホスト社会の側が変わっていくことが必要だと考えています。多文化共生社会の実現に向けて、これからもさまざまなプロジェクトを実行したいと考えています。

1 主に中高生を対象とする対面による学習支援の様子。現在は、ポルトガル語、英語を母国語とする外国ルーツの青少年約20名が在籍している
2 市民性教育プログラムの一環、高校生たちによる短編映画制作のワークショップ。多様なバックグラウンドを持つ高校生のストーリーを描いた

※1 アレッセ（ALECE）…法人化前の団体名「外国人の子どものことばと学力を考える会」のポルトガル語 Associação de Apoio Linguístico e Educacional para Crianças Estrangeiras の頭文字に由来。

※2 市民性教育…一人ひとりの権利や個性が尊重され、地域や社会の課題に対して、多様な能力を発揮しながら解決できるように、他者と自発的に関わり合う意識や、それに必要な知識とスキルを身につけるための教育。

Text＝海原美帆　写真提供＝青木由香さん

特集

現役隊員も参加のメリットがたくさん

OV会&職種別グループで先輩隊員とつながろう

コロナ禍の協力隊員の一斉帰国から再派遣が始まっているが、先輩隊員がいないことで、生活や活動の不安を抱えている現役隊員もいるだろう。オンラインで多くの人とつながれる今だからこそ、OV（Old Volunteer）会や課題別支援LinkedInグループなど、さまざまな人たちとつながり、頼ってみてはどうだろう。積極的に現役隊員と関わっている団体にその関わり方を聞いた。

Text＝池田純子（青年海外協力隊鳥取県OV会、青年海外協力隊大阪府OB・OG会、JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク、JOCVリハビリテーションネットワーク）、ホシカワミナコ（本誌　青年海外協力隊広島県OB会、課題別支援LinkedInグループ・環境教育職種、なんでも職種）　写真提供＝ご協力いただいた各位

同郷だからこそ気軽に相談しやすい 都道府県OV会編

都道府県OV会は帰国後の社会還元やOV同士のつながりを持つことを目的として発足されていることが多いが、表敬訪問のアテンドや壮行会で挨拶しただけといった印象を持つ現役隊員もいるかもしれない。ここでは現役隊員とつながりを持つ三つのOV会を紹介する。OV会によって活動内容は違うので、出身地のOV会にも問い合わせてみて欲しい。

オンラインイベントに登壇する 青年海外協力隊鳥取県OV会

20年以上前から毎年行ってきた「帰国報告会」を2022年度は初めて「活動報告会」として、現役隊員らに登壇してもらい行ったと話すのは、青年海外協力隊鳥取県OV会の会長、谷田孝之さん。

「そもそもコロナ禍で、鳥取県では帰国してすぐの隊員がいなかったので、帰国報告会ができませんでした。でもちょうど派遣が再開され始めていて、鳥取県からも2名、ガボンとベリーズに派遣されていました。それならば現役隊員とオンラインでつないで、いろいろな話をしてもらおうということになりました」

コロナ禍で会員同士もなかなか集まることができなかったが、この時ばかりはイベント会場を設け、約30名が集結した。

「会場では、オンラインの参加者が映し出される大きいスクリーンを設置。さらに客席に向けてビデオカメラを設置し、双方向でやりとりできるようにしました。イベントが始まると、会場からはいろいろな質問が飛び出し、それにスクリーンの向こうの現役隊員らが答えるといった、参加者全員が一体となった雰囲気の会になりました」

谷田さんによると、現役隊員がこうしたイベントに参加することは、活動にもプラスになるという。

「ガボンに派遣中の隊員はセネガルからの任国振替でした。ガボンに着いてすぐ2カ月の断水を経験するなど、現地の生活に慣れるまでは大変だったようですが、楽しみながら生活している様子が伝わってきました。ベリーズに派遣後2カ月の隊員は、踊りが好きで陽気な地元の人に癒やされながらも、防犯には気をつけているといった報告をしてくれました。私の現役時代もそうでしたが、現役隊員は何かしら〝伝えたい〟という思いを持っています。こうしたイベントが、そうした思いを伝える場になればいいなと思います。また現役隊員は伝える場ができると、『伝えるべきことは何だろう』と、改めて自分の活動を振り返り、考えを整理したりします。『みんなに話すからには、もう少し頑張らないと』など、自分を奮い立たせる気持ちにもなるんです」

イベント会場には鳥取大学の学生も電車で2時間かけてやって来た。「新しいつながりができた」と谷田さんは声を弾ませる。ちなみにイベントの告知は、ポスターとチラシ。県内の小・中学校、高校、大学、図書館、役所など500カ所に配布し、年度の活動をまとめた活動報告書も同じ場所に送付した。鳥取大学の学生が参加したことからも、告知の効果はあったようだ。

鳥取県といえば、南部町が「JICA海外協力隊グローカルプログラム（派遣前型）」の受け入れ先になっている。一般の人向けのイベントもさまざま開催されていて、訓練生が企画し、県内在住のカンボジアの人も参画した「ナンを焼いてカレーを食べよう」というイベントに谷田さんも参加したことがある。これからは南部町など県内のつながりはもちろん、県をまたいだつながりも積極的につくっていきたいという。

「いろいろな世代や地域の人が参加することで、面白い発想が生まれます。青年海外協力隊鳥取県OV会に特別な参加資格はありませんので、現役隊員の方も、協力隊への応募を考えている方もどんどん参加してほしいですね」

上：鳥取県出身でガボンとベリーズに派遣中の隊員2人も登壇した、リアル&オンラインイベント「令和4年度青年海外協力隊鳥取県OV会活動報告会」の様子
左：イベント告知チラシ

青年海外協力隊 鳥取県OV会会長
谷田孝之さん（※写真中央）
ニジェール／小学校教諭／2000年度1次隊・鳥取県出身

日本の家族に安心してもらう
青年海外協力隊広島県OB会

「送り出してくれた家族に心配をかけたくない」という思いはどの隊員にもあるだろうが、送り出した家族も笑顔で送り出したものの、不安はゼロではない。

1985年ごろから1年に1度「家族連絡会（留守家族懇親会）」を行っているのは、青年海外協力隊広島県OB会だ。コロナ禍で昨年と一昨年は開催を断念したものの、今年は2月に行った。会長の竹内英祐さんにお話を伺った。

「対象は広島県出身の派遣中隊員のご家族で、現役隊員10人のご家族、計16人が参加してくださいました。内容は現在の協力隊の動向、現地での健康管理・安全対策、帰国した隊員の活動報告、帰国後の進路相談体制の紹介などと質疑応答。その後広島県OB会の紹介および懇談に入り、ざっくばらんにメンバーであるOVと話をしてもらいました。話がしやすいように各テーブルに茶菓子を用意し、懇談しました」

家族連絡会は、40年近く前に広島県の国際交流室や青年海外協力隊事務局、広島県OB会が密に連携を取り始めた時期があり、その中から協力隊事務局の発案で広島県OB会に呼びかけて始まったという。近年はSNSなどにより家族と現役隊員間の連絡が容易に取れるようになったことや、コロナ禍のため中止の声もあったが、家族にアンケートを取って開催を決めた。「ご家族はいろいろな思いを持って隊員を送り出していると思います。無事に帰国して仕事に就き、楽しく生活している協力隊OVの姿を見せることが、安心につながると思います」

実際に参加した家族の反応はとてもよく、ボランティア事業に対する理解が生まれ、帰国後の就職などの心配が解消したといった感想もある。連絡会でのアットホームな雰囲気が気に入り、その後の広島県OB会の飲み会などに個人的に参加する家族もいるそうだ。

「派遣前の壮行会などで仲良くなった隊員と連絡先を交換し、ご家族が家族連絡会に参加された場合には、できるだけご家族と一緒に写真を撮り、隊員にその写真をメールします。その写真を隊員からご家族にも送ってもらうことで、家族間のやりとりが増えることを期待してのことです」

広島県OB会では、派遣前の隊員にアンケートを取っている。これは任期中に広島からエールを送りたいという意図がある。「派遣前の気持ちを聞いたアンケートを会報に全員分載せ、現役隊員の方にも郵送しています（※）。任地で会報を読み、初心を思い出してもらえたらと思っています。また、派遣が1年程度の隊員数名に依頼した寄稿文も載せています」。

広島県では、募集説明会に参加した時点からOB会になじみ、懇親会などに参加する人もいるという。帰国間近に現役隊員も広島県OB会のメーリングリストに加えて会の活動を知らせているそうだが、任期中の悩みを竹内さんに相談する現役隊員もいる。竹内さん自身も個人的に現役隊員の任地を訪ねることがあるそうだ。広島県から出発した隊員の方々は、頼れる先輩たちとつながってみてはいかがだろう。

2023年2月4日に行った、家族連絡会（留守家族懇親会）の様子

年に1度発行している会報

青年海外協力隊
広島県OB会 会長
竹内英祐さん
ウガンダ／土木／
2008年度4次隊・広島県出身

OVのレシピで食生活の充実を図る
青年海外協力隊大阪府OB・OG会

任地で元気に活動するための源になるものといえば食だ。毎日自炊するという隊員もいるだろう。2020年、青年海外協力隊大阪府OB・OG会は、協力隊派遣国の〝現地メシ〟を一冊にまとめた『くらして初めて知った（ど）ローカルごはん ―日本で作れる世界のレシピとお話―』を出版した。現役隊員が派遣先で料理する時も、協力隊OVが派遣先の思い出の味を再現する時も役立つレシピ集で、アマゾンの電子本と受注印刷で紙版も販売している（利益は国連関連団体に寄付している）。

制作の経緯について、発案者で、現在同会の副会長を務める佐藤省吾さんはこう語る。「コロナ禍で一時帰国した隊員に対して、青年海外協力隊大阪府OB・OG会としてできることは何だろうと〝考える会〟を設けたんです。任期は満了できなかったけれど、隊員としての活動を何か形に残せたらいいんじゃないかと話しているときに、この本のアイデアが出てきました。同じ時に、たまたま『世界の料理本』という本を見つけたのもきっかけの一つです。というのも私の赴任先のボツワナの料理も載っていましたが、私はそれを食べたことがなかったんです。もしかしたら隊員がレシピを書いたら、もっと身近でリアルな本ができるかもしれないと。その話をしていたのが、ボツワナOVで現役のデザイナーの伊藤洋美さんで、レイアウトすれば絶対にいいものができるだろう、やってみようか、という感じで始まりました」。

制作には現役隊員40名、OV隊員26名が参加し、66カ国の「リアル現地メシ」の情報が集まった。完成したレシピ集は、イベントなどでレシピの使用を許可したり、料理画像をフリー素材として利用可にしたこともあり、思わぬ広がりを見せた。青年海外協力隊事務局でも、動画クリエイターとコラボした料理動画を制作した（※編集部注 JICA海外協力隊公式サイトでの公開は終了しています）。

レシピ集の発刊後、21年6月には「コロナ禍で活動する隊員の今」というテーマで、現地隊員に話してもらうオンラインセミナーも開催した。

「隊員がぼちぼち活動を再開できたタイミングでしたので、ルワンダ、ザンビア、ジンバブエの現地隊員に現地から参加してもらい、活動の状況を伝えてもらいました。当時はリアルな声が入りにくい状況ということもあり、現役隊員30名を含む約160名が参加し、大盛況でした」と話すのは、現在会長を務める相川香菜さんだ。

こうしたオンラインでのコミュニケーションは増えているが、大阪府OB・OG会では現役隊員に大阪府の小学生から手紙を送ることが慣習的に行われてきた。「コロナ禍で休止しているものの、私がガーナで活動している時にも、クリスマスにカードが届き、温かい気持ちになりました」。デジタル時代だからこそ、人のぬくもりを感じる手紙は続けたいと相川さん。そしてこれからも現役隊員との関わりは増やしていきたいという。

他にも、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の大学院生からの相談を受け、大阪府OB・OG会の主催で、同大学の院生やボツワナ人に参加してもらい、ツワナ語講座をオンラインで開いている。当初は大学の研究者・院生の参加が中心であったが、これに現役隊員が参加するようになり、コロナ禍前は隊員連絡所などで先輩隊員たちから教わった、生活や活動のちょっとしたコツや将来の進路相談などにも応えているそうだ。「会としては、なるべく現役隊員や帰国隊員のサポートに回って応援したい気持ちが強いですね。そのためには、こちらから発案するだけでなく、要望ベースで一緒に活動していきたいので、ぜひ現役隊員の方もお声かけください」（佐藤さん）。

『くらして初めて知った（ど）ローカルごはん ―日本で作れる世界のレシピとお話―』
編集・発行元：青年海外協力隊大阪府OB・OG会
Amazon電子本（A5サイズ102ページ）、定価：500円（税別）
※利益は国連の関係団体へ寄付
https://www.amazon.co.jp/dp/B08MDLH4W4

青年海外協力隊
大阪府OB・OG会 会長
相川香菜さん
ガーナ／村落開発普及員／
2010年度1次隊・大阪府出身

青年海外協力隊
大阪府OB・OG会 副会長
佐藤省吾さん
ボツワナ／コンピュータ技術／
2015年度1次隊・大阪府出身

正式名称：
青年海外協力隊大阪府OB・OG会
（略称：大阪府OBOG会）
代表者：相川香菜（会長）
2023年3月現在の会員数：1360名
結成した年：1990年4月
入会資格：OVなら誰でも
会費：なし
総会などを行う頻度：年に1回
問い合わせ先や入会方法：
osakaov@gmail.com
上記メールに問い合わせ。ほか、派遣前のアンケートで「OB会からの連絡を希望する」にした場合は、帰国後自動加入される

正式名称：
青年海外協力隊広島県OB会
代表者：竹内英祐（会長）
2023年3月現在の会員数：住所もしくはメールアドレス登録のあるOV約460名
結成した年：1972年2月
入会資格：広島県から出発した隊員OV、県内で働いているなど広島県と関わりのあるOV
会費：2000円／年　※「支払った人のみ総会などで議決権を持てます。会費を払っていなくてもイベントなどへの参加は可。ぜひ会費を払って参加していただければと思います」（竹内さん）。
総会などを行う頻度：総会は年1回、2月頃。定例会は適宜必要に応じて行う
問い合わせ先や入会方法：
会のウェブサイトの問い合わせから
http://www.jocv-hiroshima.sakura.ne.jp/

正式名称：
青年海外協力隊鳥取県OV会
代表者：谷田孝之（会長）
2023年3月現在の会員数：131名
結成した年：1981年4月1日
入会資格：JICA海外協力隊経験者
会費：1000円／年
総会などを行う頻度：総会は年1回、役員会は月1回程度
問い合わせ先や入会方法：
Facebookの青年海外協力隊鳥取県OV会のページからメッセンジャーで連絡

※青年海外協力隊広島県OB会会報の郵送は、コロナ禍で郵便を受けつけていない国には発送できていないが、OB会ウェブサイトで公開している。

同職種だからこそ、活動の悩みを具体的に相談できる 職種別OV会編

現役隊員の活動相談や協力隊経験を帰国後の仕事や生活に生かしていく際、心強いネットワークとなるのが職種別OV会だ。先輩隊員が派遣国で活動する際にぶつかった壁や失敗談を、自分たちの活動の参考にもできるため、派遣前からつながっているという現役隊員もいるかもしれない。ここでは二つの団体に、現役隊員との関わり方を聞いた。

充実したオンライン勉強会で学べる
JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク

2023年に結成30周年を迎えるJICA海外協力隊幼児教育ネットワーク。発足当時から実施しているセミナーや勉強会は、数えること62回。隊員の活動報告をはじめ、各国の保育事情や話題の保育など、現役隊員やOVから学生まで、保育に関わる人なら誰でも興味を持てる内容になっている。セミナーの講師はメンバーのほか、外部から招くこともある。コロナ禍前は対面で年に1～2回、コロナ禍をきっかけにオンラインで始めるようになってからは、21年度は9回、22年度は4回と頻繁に行ってきた。

「オンラインが使えるようになって、可能性が広がった」と話すのは、会長の久保田美幸さん。「JICAシリア事務所に勤務経験があり、現在は広島の大学の非常勤講師をしているジアードさんに、昨年〝イスラムの子育て〟をテーマに話してもらったところ、大好評。続編もやってもらいました」。

コロナ禍で一時帰国になっていた現役隊員が立ち上げた自主セミナー「子どもに関わる隊員オンラインセミナー」との交流もある。「自主セミナーを立ち上げたメンバーの一人は、JICA海外協力隊幼児教育ネットワークの運営メンバーの一人で、大学教員をしているOVの教え子の橋本千鶴さん（エジプト／幼児教育／2019年度2次隊、2022年度7次隊）です。橋本さんは現役隊員ですが私たちの勉強会に毎回参加し、子どもに関わる隊員オンラインセミナーのメンバーにも、情報共有してくださっています。まさに私たちとの橋渡し役だと思います。私も先日、子どもに関わる隊員オンラインセミナーにお呼びいただき、インクルーシブ保育をテーマに私の実践例をお話ししました」。

そんな久保田さんが現役隊員の方に、ぜひ参加してほしいというのが、オンライン懇談会だ。22年に行った第1回は、坪川紅美技術顧問を囲んで行われた。「活動の心構えなどを坪川技術顧問から直接聞ける良い機会となりました。また参加した方の活動報告をそれぞれ聞いて、みんなで話し合う時間もありました。さらにガボン、エジプト、セネガルの任地ともつながり、ガボンに赴任中のシニア隊員の方が、任期後半の活動の考え方について質問する場面もありました。坪川さんや参加者の方の意見を聞いて、安心されたようでしたね」。

物のない途上国で保育をつくり上げることは、まさに保育の原点。その協力隊経験こそ、日本の保育実践に生きるものだが、その伝え方には難しさも伴うという。「帰国後、協力隊経験を現場に生かそうと思っても、なかなかうまくいかないのが現実で、そんな時に共感し合える仲間がいることは貴重です。JICA海外協力隊幼児教育ネットワークのメンバーは全員協力隊OVなので、帰国後も保育の現状や悩みについて安心して語り合えます。私自身、子育てや仕事に追われる時期はつかず離れず活動に参加してきましたが、仲間の存在は大きく、人生が豊かになりました。保育に関わる人は誰でも、活用してほしいと思います」。

坪川紅美技術顧問（前列中央）とOV会メンバー

2022年8月に行ったオンライン隊員活動報告では、仁科潤紀さん（ブルキナファソ／幼児教育／2017年度2次隊）が登壇。隊員時代の話のほか、当時制作中だった絵本『せかいのおようふく』（左写真）についても発表した。世界中の子どもたちが集まる幼稚園を舞台に、子どもたちがさまざまな民族衣装を着ていくストーリー。完成後、ブルキナファソにも届けた。

JICA海外協力隊
幼児教育ネットワーク 会長
久保田美幸（旧姓：小林）さん
マレーシア／保育士／
1989年度3次隊・東京都出身

JOCVリハビリテーション
ネットワーク 代表
小泉裕一さん
モンゴル／理学療法士／
2012年度1次隊・埼玉県出身

現役隊員も参加したリハビリ職種オンライン座談会の様子（2022年1月）

協力隊まつり2023で出店し、東日本大震災の被災者の方々の手作り品の販売なども行った（撮影＝阿部純一・本誌）

東日本大震災の被災者の方々へ施術などを行い、その活動を基に執筆した論文・資料集は閲覧できる
http://ptotjocvhomepage.blogspot.com/2020/10/blog-post.html

オンライン座談会と資料集で学べる
JOCVリハビリテーションネットワーク

理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を中心としたJOCVリハビリテーションネットワーク（リハネット）は、いち早く青年海外協力隊事務局が行う課題別支援LinkedInグループと共に、現役隊員向けのオンライン座談会を開催している。

「昨年は〝コミュニケーション〟、今年は〝適正技術〟とこれまでに2回開催しています。参加者は各10名ほど。私がファシリテーターとなって、OVのゲストスピーカーに話題を提供してもらい、それに対して現役隊員たちが話すという流れでした。隊員には必ず1人1回は発言してもらったので、それぞれの悩みや困り事を話してもらう機会にはなったように思います」

そう話すのは、代表の小泉裕一さん。現役隊員から出てくる悩みは「こちらが教えようと思っても聞いてくれない」「カウンターパートが突然いなくなった」など、普遍的なものだという。「だからといって、OVが上から物申すのではなく、あくまでも同じ立場で励ますというスタンスは守っています。私が協力隊に参加したのは2012年ですから、この10年間にデジタル環境は向上し、隊員からの発信や隊員同士の交流の仕方がだいぶ変わってきたので、現役隊員の話を聞くことは私自身やOVにとっても勉強になっていると思います」

コロナ禍前は対面でのイベントを企画したが、運営者に遠方住まいが多く、実現はままならなかった。しかしコロナ禍でオンラインが普及し、世界各国と一瞬でつながれることで、イベント開催のハードルは一気に下がった。今後はJOCV看護師ネットワークとのコラボイベントも企画しているという。

「同じ医療系なので、看護職の方からは、こんな進路もあるんだ、こういう選択肢もあるんだという話が聞けるといいなと思っています」

現在、小泉さんはOV会の3代目の会長。OV会として力を入れたいことが二つあると話す。

「一つは現役隊員を含めた隊員同士のつながりをつくること。もう一つはこれから隊員を目指す人に、良い情報提供の場でありたいということです」

力を込めて話す小泉さん自身、実は隊員を目指し、隊員になる前からOV会に入り、勉強会に参加していたとか。帰国してからもOVに進路相談に乗ってもらっていた。

「今も年に1回、勉強会や交流会を行っていて、そこで現役隊員から悩みがあれば聞きますし、帰国隊員から進路相談を受ければ、OVの適任者を紹介します。とにかく私自身、この会のおかげで今の自分があるというぐらい恩恵を受けています。お世話になった先輩方の思いを絶やしたくないという気持ちが大きいので、これからもしっかりと運営していきたいですね」

リハビリ職種の隊員にとっては、活動の参考になる資料もある。小泉さんも隊員になる前に参加したという、東日本大震災で被災した方々に対してのリハネットの支援活動などの成果をまとめた論文集だ。QRコードからアクセスすれば、誰でもPDFで読むことができる。興味のある人はぜひ。

正式名称：
JOCVリハビリテーションネットワーク
代表者：小泉裕一（代表）
2023年3月現在の会員数：64名
結成した年：2004年
入会資格：理学療法士、作業療法士、言語聴覚士として働いている人
会費：1000円／年　※正会員、準会員関係なし
総会などを行う頻度：年1回。正会員だけ参加。会報を年2回発行
問い合わせ先や入会方法：
会のウェブサイトの問い合わせから
https://sites.google.com/view/jocvrehanet/

正式名称：
JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク
代表者：久保田美幸（会長）
2023年3月現在の会員数：106名
結成した年：1993年
入会資格：協力隊の保育・幼児教育分野のOV（シニア隊員含む）、障害児教育など子どもに関わる職種OV（2022年度より）　※オンライン懇談会は現役隊員も参加可能
会費：2000円／年
総会などを行う頻度：年1回
問い合わせ先や入会方法：
jocvyoukyou@gmail.com 久保田美幸。入会希望者には、上記メールアドレスより申込書を送付

SNSで気軽に同職種と情報共有や発信
課題別支援 LinkedInグループ編

「現役隊員の活動の悩みの相談場所」として最も利用しやすいのが、青年海外協力隊事務局が公式で行っている課題別支援LinkedInグループだ。前ページで紹介したJOCVリハビリテーションネットワークのように、職種別OV会とコラボした座談会などを行うグループもある。すでに登録済みの隊員も少なくないと思うが、改めてそのメリットについて、青年海外協力隊事務局の担当者の方々に聞いた。

環境教育に関心のある隊員とOVが交流
「環境教育職種」グループ

編集室　2023年4月現在、LinkedInグループには、人数の多い職種別の15のグループと、どの職種の隊員でも参加できるなんでも職種グループの16グループがあります。まずは積極的に活動している環境教育職種のグループについて教えてください。

倉持さん　環境教育グループは、環境教育に関心のある隊員の方であれば、環境教育職種でなくても参加できるグループです。環境教育OV会メンバーの参加も多く、普段からOVもさまざまな情報を投稿してくださっています。

編集室　環境教育職種のOVの方々は、帰国後も仕事だけでなくプライベートでも環境問題に関わっている方が多いと思いますから、現役隊員の方も心強いアドバイスがもらえそうですね。

星井さん　そうなんです。自分が環境教育職種でない場合でも、任地の村や学校などで環境問題に取り組んだり、啓発活動をしたりすることもあると思いますから、参加しておくと活動の幅が広がると思います。

編集室　LinkedInグループから派生しているオンライン座談会もあると聞きました。

星井さん　はい。座談会はこれまでに5回行いました。毎回、話題提供者のOVの話の後、現役隊員の活動の悩みや相談に、OVや技術顧問、専門家の方々がアドバイスしてくださっています。

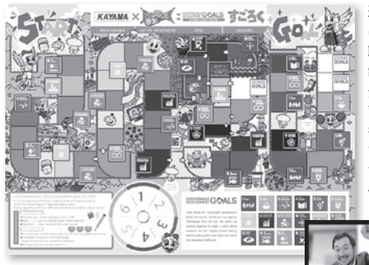
倉持さん　今年1月に、ごみ問題をテーマに座談会を行いました。派遣中隊員が11人、派遣前隊員が9人、環境教育のOVが9人のほか、全部で34人という過去最多の参加でした。1時間半のプログラム終了後も、残った方々で、話が盛り上がったようです。

編集室　座談会の実りはなんでしょうか。

星井さん　「ごみ問題は人間の生活や人間関係で成り立っているため、人間関係を育みしっかり話し合うことが大事」といったアドバイスがOVの方からあり、これには、皆さん納得したようです。

倉持さん　直近では5月に、環境教育OV2名をお招きし、座談会「帰国後のキャリア形成（国際公務員＆NPO編）」を実施しました。派遣中の隊員には、隊員経験を生かしたキャリアステップを考える機会になりました。

今後も座談会を計画しています。LinkedInグループも座談会も、悩み相談の場にとどまらず、お役立ち情報や活動のナレッジを共有し、アーカイブ化する場として活用できるように展開していければと思います。



過去の環境教育職種座談会では、環境教育OVが、帰国後に就職した廃棄物処理を行う企業で制作した「SDGsすごろく」の紹介も。任地の学校などで環境教育を行う際は、すごろく作りから行う。国や地域の状況に合わせて子どもたちに項目を考えさせ、すごろくを完成させる（制作・画像提供＝加山興業株式会社）

5月に実施した「帰国後のキャリア形成」に関する座談会。環境教育OV2名の話を聞いた

お話を伺ったのは

「環境教育職種」グループ

副担当
青年海外協力隊事務局
星井直子さん
タイ／日本語教育／1995年度3次隊

主担当
青年海外協力隊事務局
倉持百花さん

「なんでも職種」グループ

副担当
青年海外協力隊事務局
保坂 都（旧姓：佐藤）さん
ウガンダ／家政／2007年度3次隊

主担当
（公社）青年海外協力協会
小杉尚子さん
ザンビア／理数科教師／2002年度2次隊

あらゆる職種を知り、視野が広がる
「なんでも職種」グループ

編集室　職種ごとのOV会は、悩みの共有がしやすいですね。一方で、協力隊の職種は90種類以上ありますから、LinkedInグループの職種に、自分の職種がない方もいます。

保坂さん　そのような方々に利用していただいているのが、どの職種の隊員でも入れる「なんでも職種」グループです。なんでも職種グループでは、通常のグループ内での書き込みのほか、これまでに2回オンライン形式の座談会を行ってきました。

小杉さん　1回目の座談会は昨年5月です。『技術移転なんて無理!?協力隊のマンパワー問題』をテーマに、番組制作の職種でベトナムのテレビ局に派遣中の隊員に登壇してもらい、ご自身の活動を発表してもらいました。

現場のさまざまな課題が見えてくる赴任8カ月目だったので、すぐに技術移転は難しいと判断して、どう行動したかをお話ししてもらいました。

編集室　編集職種の技術専門委員として編集室からも参加させてもらいましたが、このテーマは職種の区別なく、派遣された協力隊員の多くが感じる悩みとあって盛り上がりましたね。

小杉さん　発表者の隊員の場合は、担当のテレビ番組の知名度を上げるべく、ベトナム人スタッフをインフルエンサーにしたかったそうですが注目を浴びるのが難しかったため、「自分が日本人インフルエンサーとなってまずは番組のファンを増やすところから始める」ことを決意し、フォロワーを増やしたといった経験談を話しました。聞いていた他の現役隊員からは、SNSを駆使した活動の仕方などの質問が次々に挙がりました。

編集室　先輩隊員からは技術移転の前にカウンターパート（以下、CP）にやる気を持たせるために自分が取った方法として、CPがさぼっている時に自分も姿を消してさぼっているように見せかけ、危機感を感じたCPが自分から動くようになったといったアドバイスも印象的でした。

保坂さん　SNSを活動に取り入れる隊員も増えてきていますから、他の隊員がどうしているのか、皆さん興味津々だったのではないでしょうか。

小杉さん　2回目の座談会は昨年9月で、観光職種でセルビアとヨルダンに派遣中の隊員2名の情報提供の下、行われました。「配属先でターゲット設定がされておらず、戦略が立てづらい」ことや、「いいコンテンツやツールがあっても活用されていない」といった課題について、他の隊員から多くの意見が出ました。同じ職種間でなければ問題解決ができないわけではなく、共通の悩みがたくさんあることが分かりました。

希少職種の方は同期や同じ派遣国に同職種隊員がいないケースが多いため、職種に関する悩みや、他の人はどうしているのだろう?という疑問を共有する場がなかなかありません。国と隊次を超えることで、同じ職種の隊員を見つけ、つながることが可能です。

また職種が違っても、悩みを共有することで、違う視点からアドバイスをもらえることもあります。

保坂さん　今後、座談会は少し間が空いてしまったので、テーマを決めない会を一度実施して、次のテーマを探したいと思っています。

LinkedInグループは引き続き、ちょっと寂しくなった時にのぞいて見られるような、アットホームな空間にしたいと考えています。事務局側からの投稿としては、どんな職種でも役に立ちそうなセミナーのご案内や課題別派遣前訓練の様子を投稿していきますので、現役隊員の方々も、派遣国の様子や活動報告を気軽に投稿してもらえたら嬉しいです。

なんでも職種グループのLinkedInグループ。この小杉さんの投稿のように、情報共有の場として使われることもある

なんでも職種

対象：希少職種、他にグループがある職種の方も歓迎
登録数：隊員115名、OVなど32名（2023年4月10日現在）
平均投稿数：12件/月
内容：15グループに入らない職種の隊員を対象としたグループ。共通の派遣国や職種の隊員らの、隊次を超えたつながりを目指す

環境教育

対象：環境教育に関心のある隊員は参加可
登録数：環境教育隊員58名、その他の職種の隊員18名、OV20名ほか（2023年4月26日現在）
平均投稿数：11件/月
内容：派遣中隊員の活動報告や悩みの共有、オンライン座談会の実施。コンポスト作りやごみ置き場の写真投稿リレーなど

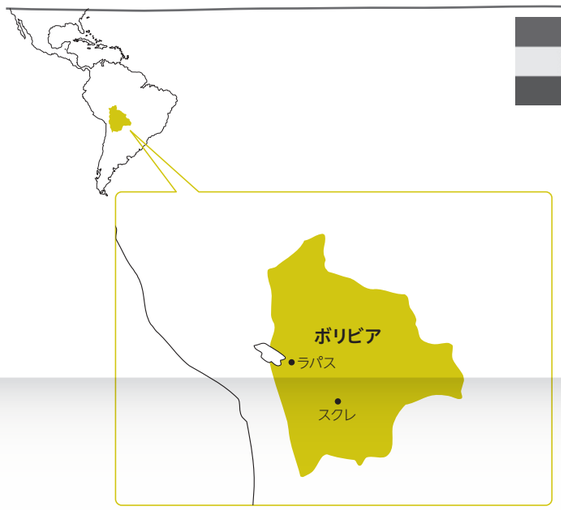
その他の課題別支援LinkedInグループについて知りたい方は、こちらの記事から
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202207/pdf/crossroads_2022_07.pdf

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈ボリビア〉

絶景で有名なウユニ塩湖や、銀・スズなどの鉱山で知られるボリビア。
協力隊派遣の歴史は半世紀近くに及び、多くの隊員が活動してきた。

ボリビアの基礎知識



ボリビア多民族国

面積：110万平方キロメートル（日本の約3倍）
人口：1,151万人（2019年　世銀）
首都：ラパス（憲法上の首都はスクレ）
民族：先住民41%、非先住民59%
言語：スペイン語およびケチュア語、アイマラ語を中心に先住民言語36言語
宗教：国民の大多数（95%以上）はカトリック教徒

※2021年2月16日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bolivia/data.html#section1

派遣実績

派遣締結日　：1977年12月19日
派遣締結地　：ラパス
派遣開始　　：1978年4月
派遣隊員累計：1,338人

※2023年4月30日現在
出典：国際協力機構（JICA）

世界最高地の首都として知られるラパス。すり鉢状の地形にビルや住宅が建ち並び、場所によって数百メートルの標高差がある

＼ お話を伺ったのは ／

小原（おはら） 学（まなぶ）さん

PROFILE
JICA中南米部長。1993年に国際協力事業団（現JICA）に入団。99～2002年、ボリビア事務所駐在。総務部、中南米部、ホンジュラス事務所、青年海外協力隊事務局などを経て、18年から22年、ボリビア事務所長。22年4月より現職。

豊かな伝統文化を大切にしながらも絶えず社会の変化が感じられる南米有数の親日国

日系移民や国際協力の分野で日本との関わりが長いボリビア。協力隊派遣も南米では早い時期に始まった。JICA中南米部長でボリビア駐在歴が通算7年の小原 学さんに、国の特色について伺った。

「ボリビアの魅力は多様性です。荒涼としたアンデス高地にある標高3600メートルの首都ラパスから、日系移住地もある東部の低地に行くと緑豊かな熱帯に変わります。地方ごとに住んでいる人々の気質、文化、産業も異なるため、違う国に来たような気持ちになります」と話すのはJICA中南米部長の小原 学さんだ。

ボリビアは南米大陸のほぼ中央にある内陸国。日本の約3倍の国土に1200万人ほどが住む。アイマラ、ケチュアなどさまざまな先住民が人口の41パーセントを占め、豊かな民俗文化が息づいている。

1825年、アンデス山間部のスペイン植民地のうちアルト・ペルーと呼ばれた地域が、南米の独立指導者シモン・ボリバルにちなみ、「ボリビア共和国」として独立した。1952年のボリビア革命で先住民の権利が認められたが、反動で64年から軍政となる。82年に民政に復帰したのち、2006年にはボリビア史上初めて先住民出身のエボ・モラレス大統領が就任し、憲法の改正を経て国名が「ボリビア多民族国」に変わった。近年は天然ガスなどの輸出が伸び、1人当たり国民所得は3000ドル（約40万円）を超えて中進国並みになっているものの、「まだ南米で最も所得格差が大きくて貧困層が多く、地方ではそれをより感じます」。

他方、政府は先住民の昔ながらの尊厳のある生活を回復するという『VIVIR BIEN（よく生きる）』を理念に掲げ、先住民の伝統文化や権利を尊重する政策を進めてきた。ただ近年は、モラレス大統領が失脚するなど、政治的な変動も少なくない。

「政策への抗議では道路封鎖という手段がよく取られることから物流が時折止まったりしますが、人々は親切で治安の良い国です。日本人の移住の歴史が120年を超え（※）、日系社会への信頼が厚いことからも、日本人にはとても好意的で、長年行われている経済協力のベースになっています」

ボリビアへの協力隊の初派遣は1978年で、無償資金協力や技術協力との連携で人材育成に貢献してきたことが特徴だ。保健医療分野を中心に日系社会ボランティアを含め累計1300人以上が派遣され、教育、農業・農村開発、職業訓練、環境教育などの分野で活躍してきた。今後に向けても、所得格差の是正に資するような収入向上や教育といった分野の隊員が多く要請されている。「配属先の予算や人材が不足していたり、選挙で地方の行政組織でも職員が入れ替わったりといった活動上の難しさはありますが、総じて隊員に快く協力してくれる国民性です。格差解消や脆弱（ぜいじゃく）な人々のために共に創意工夫していく面白さが待っています」。

カーニバルで踊る人々。地域ごとに多種多様な踊りがあり、衣装も大きく異なる

※…1899年、ペルーへの入植者の一部がボリビアに転住したことに始まる。2019年7月には眞子内親王殿下（当時）御臨席の下、日系移住地のあるサンタクルス県において日本・ボリビア双方の関係者237名が出席する日本人移住120周年式典が盛大に開催された。

Text＝工藤美和　写真提供＝小原 学さん、中島美鈴さん、山本貴子さん、伊波興穂さん、飯渕一樹（本誌）

ICUの看護師に一次救命処置について教える山本さん（右）

CPの故郷の村でお世話になった、CPの母親との一枚

山本貴子（やまもとたかこ）さん

看護師／2016年度4次隊・奈良県出身

PROFILE

専門学校卒業後、大阪府内の第三次病院の集中治療室などに9年間勤務。外国人患者の受け入れにも携わった経験から「他文化を知りたい」と協力隊に参加。帰国後に、看護師として働きながら大学院博士課程でボリビアの医療保険制度を研究。現在は、医師サイドに立った診療を一定の範囲で行える「診療看護師」を目指し、別の大学院の修士課程で学んでいる。

中島美鈴（なかじまみすず）（旧姓・足立）さん

看護師／1989年度3次隊・兵庫県出身

PROFILE

看護師として京都府立医大病院で耳鼻科と子ども病院のICUに約7年勤務後、京都府の現職参加第1号として協力隊に参加。帰国後は復職。のちに夫と共にボリビアへ。1997年から通訳を仕事にし、2022年からJICAの技術協力プロジェクト「救急産科ケアリファラルシステム強化プロジェクト」に専門家（業務調整、研修）として従事している。

ボリビア社会の悩みに向き合った隊員たち

ボリビアへの日本の協力では重要な位置を占める保健医療分野と、世代交代に直面する日系移住地で奮闘した隊員を紹介します。

トップレベルとなった「日本病院」の小児看護の土台づくりに貢献

ボリビア第2の都市サンタクルス市に日本の無償資金協力によって1986年に建設された「厚生省サンタクルス総合病院」。複数の技術協力プロジェクトが行われ、現在は「日本病院」としてボリビアのトップレベルの第三次医療（※1）を担う総合病院となっている。85年から95年までに23人の青年海外協力隊員が活動し、医療従事者の育成や病院運営の強化を支援してきた。看護師として小児科の集中治療室（ICU）に派遣された中島美鈴さんもその一人だ。

「当時の日本とボリビアの医療事情がかなり違っていてびっくりしました」

日本では使い捨ての医療器具が一般化していたが、現地では注射器はガラス製で、針と共に何度も滅菌消毒して使用。包帯やチューブさえも滅菌して再利用していた。「ICUではエアコンもない暑い中に子どもが寝かされ、オムツがぬれて泣いても看護師は放置していました。医師は感染が起きる恐れのある処置を行ったり、テレビでサッカーが始まると患者の緊急事態にも対処しないこともありました。抗生剤不足で亡くなる子どももいるなど、日本の常識とは懸け離れたことが多く、研修医や看護師に毎日怒っていました」。

スペイン語を思うように話せずカルテを読むにも苦労していた中島さんはストレスを抱え、技術協力プロジェクトに派遣されていた日本人専門家に愚痴を聞いてもらう日々を送った。

中島さんのカウンターパート（以下、CP）は、高い看護技術を持ち、学ぶ意欲と吸収力のある正看護師だった。彼女は中島さんが指摘する内容や不満を正しいと感じていたが、自ら医師には言えない立場にあり、看護の現状を変えることのできないもどかしさを抱えていた。ストレートに怒る中島さんの姿は新鮮に映ったようだった。

転機が訪れたのは赴任して1年が経つ頃。CPに故郷の祭りへ行く旅行に誘われた。低地のサンタクルスから首都ラパス、さらに山奥へと長距離バスでたどり着いたのは先住民の村だった。

「その村では自宅で採れた作物と肉を交換するなど物々交換の生活をしていて驚きました。皆さん、スペイン語の拙い私にとても親切にしてくれて、1週間過ごすうちにスペイン語が目からうろこが落ちたようにわかるようになったんです。さらに、ボリビアの人がどのような環境で育ってきたのか知ることができました」

スペイン語に自信がついたことで、医師や看護師たちとの向き合い方も変わった。「看護師たちは複数の病院をかけ持ちしてシフトをこなしていたため、忙し過ぎて気持ちにゆとりがなくなってしまっているということ、おむつを替えたくても洗濯室からおむつが届かないことなど、いろいろな事情があることを理解できました。その上で、どのように患者さんやその家族に接するのか私が実際にやってみせたりもしながら、ようやく看護の本質を伝えられるようになりました」

その後、プロジェクトの看護の専門家と共に小児科看護のマニュアルを作成した。「少しでも良い看護にしていくため、理想論ではなく、日本病院の現場の状況に即したスタンダードを残しました」。マニュアルはその後、全国の病院でも採用されている。

「いろいろな不条理があってもラテンの明るさで前に進むボリビア人が好き」という中島さん。現在はボリビアの妊産婦と新生児の死亡率低下を目指す技術協力プロジェクトで専門家を務め、これまでの協力の深化と絆の広がりを実感している。今や地域医療を指導する位置を占める日本病院や関係先で、隊員時代の〝仲間〟が活躍し支えてくれているのだ。ケンカしていた研修医はこども病院の院長になり、元CPは大学で看護学を教え、その娘は医師となって中島さんが取り組むプロジェクトに参加している。日本人チームにもボリビアの隊員OVや専門家の経験者が集まってきた。

「日本病院は大切に維持され使われています。昨年11月から2名の隊員も活動しており、ここで新たなことを伝えてくれると期待しています」

地方病院の看護の質の向上に向け院内の教育体制づくりに奮闘

ボリビア国内は標高によって高地、中間渓谷、低地の三つに分かれる。起伏が激しく広大な国土が交通網の発達を妨げ、地域間格差を生んできた。標高4000メートル級の高地、ポトシ県は国内でも貧困層が多く、現在でも医療レベルは他県に比べ遅れている。

2017年に県内唯一の第三次医療機関、ポトシ県立ダニエル・ブラカモンテ病院に派遣された山本貴子さんはICUでスタッフと共に業務をしながら、院内の看護の質の向上に取り組んだ。

「衛生意識が低く、科学的根拠のないケアが行われるなど、患者さんの命の危険に関わる問題がありました」

山本さんは、ICUの現場で見つけた問題を一つ一つ改善していった。例えば、ケアに使う手袋の使い回し。本来は使い捨てだが、各看護師への割り当て量が不足しているために使い回されていた。使用頻度の調査を行い、その結果を基に院内で供給量の交渉をしてもらい充足につなげた。また、ICUに出入りする医師らにも手指消毒を徹底するよう声がけやポスターによる啓発活動も行った。「現地の看護師は医師に意見しにくい立場にありますが、『あの先生が消毒していなかった』などと報告してくれるようになりました。医師も渋々ながら私の言うことは聞いて消毒していました」。

※1…第三次医療＝複数の診療科にわたる処置を要し、緊急性・専門性の高い患者に対応するための医療。

活動の舞台裏

「チョリータさん」の移り変わり

ボリビアやペルーでは、俗に先住民系の人のことを男性ならば「チョロ」、女性は「チョラ」または「チョリータ」と呼ぶことがある。男性の服装には決まった特徴はあまりない一方、チョリータは長く下げた三つ編みの頭に山高帽を乗せ、ひだが多く裾の広がったスカートという独特なスタイルで生活していて、在住の日本人の間では「チョリータさん」との愛称もよく使われる。

山高帽と長いスカートを身に着けた典型的な〝チョリータさん〟。

中島美鈴さんの任地のサンタクルス市はスペイン人が中心となって開拓した街で、約30年前、チョリータさんの格好をした人は市場以外ではほとんど見かけなかった。「先住民語を人前でしゃべる人もいませんでした。スペイン系の血の濃いことが美徳とされていたため、差別を恐れて出自を隠す雰囲気がありました」。

サンタクルスに限らず先住民の立場が低い状況は国内で根強かったが、時がたつにつれて社会的地位は徐々に向上。2006年にはボリビアで初めて先住民系の大統領が誕生した。今やサンタクルス市内にもチョリータさんの姿が増えている。「権利が拡大したこともありますが、『恥ずかしいことではない』とみんなが自覚したのだと思います。チョリータさんに戻る人も増えたと聞きますし、自分がなりたい姿で自然に生きていける国になったのは大きな変化だと感じますね」。

沖縄にやって来た子どもたちは、世界のウチナーンチュ大会でのパレードにも参加した

文化学習として、三線やエイサーなども教えた伊波さん

伊波興穂（いはこうほ）さん

小学校教育／2015年度1次隊・沖縄県出身

PROFILE

教育大学の障害児教育教員養成課程を卒業後、沖縄県の支援学校や小学校で8年間、教壇に。現職教員特別参加制度を利用して青年海外協力隊に参加。帰国後は、県立沖縄盲学校を経て、2022年から県立沖縄ろう学校に勤務。

看護師は、吸引や体位変換などを経験で身に付けた技術だけで行っていた。「そこで、心肺蘇生などの一次救命処置や心電図モニターの見方、床ずれの管理方法など根拠に基づく技術を教えました。患者さんの状況を評価する看護経過表は15年以上更新されていなかったので、すでにレベルの高い医療を導入しているボリビア国内の複数の私立病院を参考に改定を提案したところ、ICUで取り入れてもらえました」

そうした中で山本さんは、看護師がそれぞれに技術を持っている一方で、病棟ごとに能力の差があり、病院内に統一された教育体制や看護マニュアルがないことに気づいた。そこでCPである看護師長と相談し、院内全体の看護師を対象にした講習会を行っていった。

さらに、自身の活動終了後を考え、病院内に教育委員会を設立して教育体制を整えることや、看護の手順をまとめたマニュアルを作成することを提案。ICUでは看護師たちが意欲的だったおかげで協力してマニュアルを完成させることはできたが、病院内の委員会の活動は任期中には始まらなかった。

「委員会の設立決定後、CPの病院師長が2回代わり、そのたびに委員の人選などの話が振り出しに戻ってしまいました。病院師長になると権限と責任は増えるものの金銭的手当がつかないため、人員が定着しないのです。隊員には対応が難しい問題でした」

ボリビアで、制度や考え方の違いから救えない命があることにも無念さを感じたという山本さん。「医療保険制度が整っていないため、保険未加入で医療費を全額負担しなければならず、治療を断念して病院を去る患者さんが少なからずいたのです。日本なら助けられるのに、と悲しい思いをしました」。

帰国後、山本さんは、ボリビアの医療保険制度について大学院で研究を行い、現在は診療看護師を目指して学んでいる。診療看護師は、医師の不在時でも迅速かつ安全に一定の範囲内で医療を提供する役割を担うことができる。「一人でも多くの命を救うため、日本や海外の病院で、看護の質の向上に貢献していきたいです」

オキナワから沖縄へ 日系の生徒を引率した先生

ボリビア東部低地のオキナワ移住地（※2）やサンファン移住地は、第2次大戦後に日系移民がジャングルを開拓し、国内有数の農業地帯に変えたことで、非日系人にも知られている。移住から60年以上過ぎて世代交代が進む中、日系の子どもたちのアイデンティティの悩みに向き合ったのが、2015年、オキナワ日本ボリビア協会に小学校教育で派遣された伊波興穂さんだ。

沖縄県内で教員として働いていた伊波さんは、隊員応募以前の14年にオキナワ移住地を訪ねた経験があった。かつて県の事業で日本語教師として移住地へ赴任したことのある先輩教員に、ボリビア旅行へ誘われたことがきっかけだった。伊波さんも沖縄県出身だが、移住者についてはよく知らなかった。

しかし、遠く離れた南米で日本語を話す同世代の3世の若者たちが、「母県から来た」と大歓迎してくれ、移住地の催し物などで主体的に働く姿に驚いた。伊波さんは、1世や2世を尊敬し、日本・沖縄の文化を次世代に残したいという彼らの思いに心動かされた。

「それまで郷土を強く意識したことはなかったのですが、僕もウチナーンチュ（沖縄の人）で良かったと誇りを感じ、それを教えてもらった恩返しをしたいと思いました」

県による日本語教師の派遣は打ち切られていたが、現職教員特別参加制度で、県の教員を協力隊員としてオキナワ移住地に派遣することが決まり、伊波さんは迷わず応募した。移住地の小学校では8年生（日本の中学2年生相当）の担任と日本語教育、幼稚園クラスのリトミック（※3）、全学年の体育の授業を担当。約60人の生徒は4世や5世が中心だった。

「県の日本語教師派遣が途絶えていたこともあり、低学年生はもはや外国語として日本語を学ぶようになっていて、『ボリビアで暮らしていく私たちがどうして日本語を勉強しなければいけないのか』という声に悩みました」

同僚の日系人教師たちもその意義を生徒たちにうまく伝えられずにおり、「将来どうするかは、生徒たち自身が考えて決めるしかない」と思った伊波さん。沖縄で「世界のウチナーンチュ大会」（※4）の第6回大会が16年に開催されることに目をつけ、それに合わせて生徒を現地へ連れて行くことを企画した。

移住地から一度に大勢の子どもたちが日本へ行くのは初めてのことだった。しかも費用は各家庭の全額負担となるため、「あまり希望者が集まらないのでは」と考えていたが、思いがけず対象学年の8割に当たる7、8年生17名が参加を表明。保護者からは「自分たちはボリビアを出たことがないが、子どもたちにはぜひ自分のルーツを見てきてほしい」と後押しの言葉も受けた。アメリカを経由するためのビザ取得などに奔走した伊波さんだったが、どうにか20日間の沖縄行きを実現させた。

滞在中、生徒たちは県内三つの中学校に分散して体験入学し、親戚に会い、沖縄戦や移住の歴史も現場に立って学んだ。生徒たちは沖縄や日本を体験する中で瞬く間に日本語を上達させ、新たにできた沖縄の友達や、他国で活躍する日系青年たちとの交流を楽しんだ。

「子どもたちはきっかけがあればこんなに伸びるんだと感じて、嬉しかったです。自身のアイデンティティについて、子どもたちに選択肢を与えられてよかったと思っています」

それから5年余りがたち、高校を卒業した生徒たちは、ボリビア各地や他の中南米の国々、あるいは日本で、就職や進学など各自が決めた道を歩んでいる。

「その姿は、かつて沖縄から海を越えていった1世の人たちのように頼もしく感じます」

※2…オキナワ移住地＝沖縄戦後の土地・物資不足の中、琉球政府が呼びかけた海外移住事業で1950年代にボリビアに入植した沖縄系移民が開拓した町。現在は第1・第2・第3移住地の3地区に、沖縄にルーツを持つ人が約900名暮らす。

※3…リトミック＝音楽教育と情操教育を組み合わせた教育手法で、リズムに合わせて体を動かすなどのアクティビティを行うことで感性や運動能力の育成を図る。

※4…世界のウチナーンチュ大会＝沖縄にルーツを持つ海外在住の日系人が、沖縄に集まりネットワークを広げるイベント。1990年からおよそ5年に1回のペースで催されている。

活動の舞台裏

新鮮なお刺し身定食、あります

「ボリビア事務所員としての駐在から十数年ぶりに、所長としてボリビアに赴任して驚いたのは、ニジマスを食べる文化が広がっていることでした。これには協力隊員も一役買っています」と言うのは前JICAボリビア事務所長の小原 学さんだ。

チチカカ湖では20世紀前半から先進国によるニジマスの放流が行われ、日本は約40年前に養殖の技術協力を始めている。無償資金協力で水産センターを建設したほか、JICA専門家や協力隊員も派遣。隊員たちは近隣の村への稚魚の配給と、技術普及のための巡回指導に従事した。現在、ニジマス生産量は年間500トンを超えて増加し、ボリビアの1人当たり水産物消費量を押し上げている。

ラパスの市場で売られているニジマスなどの魚。その場でおろして売ってもらえる

ボリビアではニジマスは一般に唐揚げやソテーなどとして消費されるが、ラパスなど大都市の日本料理店では刺し身や寿司でも供される。現地で活動する隊員にとっても嬉しい食材だ。「ポトシでは新鮮な魚に飢えていたので、おいしいニジマスが食べられる場所があると聞いて出かけていったこともあります」（山本貴子さん）。

専門家に聞きました！

失敗に学ぶ

現地で役立つ人間関係のコツ

今月のテーマ：自分主導で仕事をして反発された

今月のお悩み

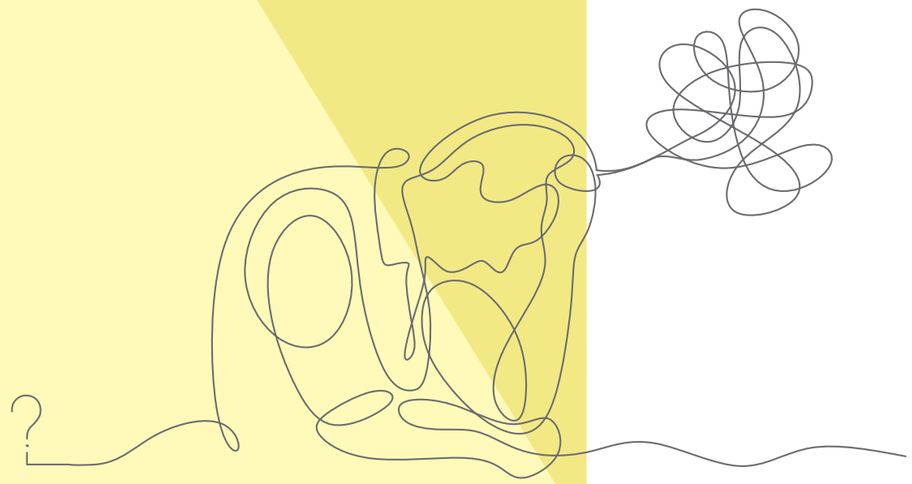
テキパキ仕事をして手本を見せたつもりが職場で浮く結果になってしまいました。

（コミュニティ開発／男性）

任期序盤の頃の失敗です。配属先では皆仲が良く、お茶の時間以外でもおしゃべりで一日が終わってしまうような日がしょっちゅうありました。

私は言語が堪能ではなく、まずは自分がやっている姿勢を見せて成果を出せば同僚たちも変わるのではと、おしゃべりに参加せずに同僚たちの分まで仕事を続けました。

ところが、喜ばれるどころかよそよそしくされたり、同僚が現場に行く時に誘われず、職場に一人残されたりするようになりました。



三好先生からのアドバイス

おしゃべりの中にただいることが大事なことである場合もあります。無駄に思える時間が、さまざまな機会のスタートになることも。

日本人は現地の人からすると若く見られがちですし、言語も完璧でないケースが多いでしょうから、配属先の人からすると「受け入れてあげている」といった場合も多くありそうです。

時に相手の立場に自分を置き換えてみてはどうでしょう。ある日職場に言葉もまともに話せない若者がやって来て、自分たちとは違うモードで働きだしたら、反発したくなりませんか。まずは相手のやり方に合わせてみること、そこで起きていることを観察することに時間をかけていいと思います。

「無駄に思えるおしゃべりの場にいること自体が大事だった」と語った先輩隊員がいます。言葉があまりわからなくても、いろんな機会に声をかけてもらうのはすべて目的のないようなおしゃべりの場だったとのこと。声をかけやすい雰囲気で存在することで声をかけてもらい、次の道が開けてきたそうです。

言葉がわからなくて居づらい、ならば自分で進めてしまおうと、パソコンと向き合うばかりになるのはもったいないことです。少し踏ん張り、職場の人との時間を大事にしましょう。

技術移転よりマンパワーを求められるという悩みもよく聞きますが、まずはマンパワーでもいいと思います。役に立つ中で仲良くなり、信頼され、相手や組織、その土地の価値観を知る。根気のいることですが、急がずに相手を理解することが、国際交流の土台だと思います。

相手が何もしない、こんなに働かなくていいのか、私は何も期待されていない、自分はなんのために来たのかと、協力隊に参加した気持ちが揺らぐ時期が多くの隊員にあります。隊員にとっては2年間の短期勝負、しかし現地の人にとっては期限のない日常で、今までそれで回ってきたわけですから。性急に変化を起こそうと思うのは傲慢（ごうまん）かもしれません。

配属先に高学歴な同僚がいることもあります。良かれと思って伝えた改善点に対して、若いよそ者にプライドを傷つけられたと受け取ることもあるかもしれません。日本は反省の文化で、かなりうまくいっても反省点を出しながら次への改善を目指しますが、相手の文化でも同じとは限りません。改善点を指摘されただけで屈辱を与えられたと感じる文化もあります。振り返り一つとっても、日本式が当たり前ではなく、その文化を知った上で対応する必要があると思います。

現状把握をするため配属先の顔写真入り組織図を作った先輩がいます。いろいろな人に尋ねながら作成するうち、事務所が他にいくつもあることがわかったり、キーパーソンを教えてもらったり。ビジュアル化することで、質問することすら思いつかなかったことも、芋づる式に教えてもらえたそうです。

顔写真入り組織図作りのいいところは、組織の人間関係がわかるため、いざ活動を進める時の相談先や提案先の手がかりにもなることです。例えば、自分に興味を持って話しかけてくれる人は頼りにして活動を一緒に進めたいと思いますよね。でも、その人が職場では異分子で、だからこそ新人のあなたに話しかけてきたとしたらどうでしょう。他の人の協力を得にくくなる可能性もあります。組織図作りは現状把握をする上でなかなか効果的な活動に感じました。

よそ者のあなただからこそできること、組織の慣習のハードルを越えてできることもあります。例えば上下関係が厳しい配属先で、いいアイデアを持っていても上司には絶対に提案できない同僚がいたとき、よそ者でJICAというバックがあるからこそ、上下関係を超えてその案を上司に伝えてあげることができます。その案が評価されたら、「あなたのアイデアが評価されたよ」と一緒に喜んであげる。そんな役割を果たせるようになるためには、じっくり相手の世界を知る土台の時間が必要です。それは自分自身を知る時間でもあるように思います。

今月の教える人　三好直子（みよしなおこ）さん

JICA海外協力隊技術顧問（環境教育）

日本シェアリングネイチャー協会専務理事・トレーナー、海の環境教育NPO bridge理事。「自然・異文化・体験からの学び」をキーワードに、ネイチャーゲームの指導・普及、海の環境教育教材「Lab to Class」の普及など、体験型の環境学習・国際交流を行う。

Text＝ホシカワミナコ（本誌）　写真提供＝三好直子さん　※質問は現役隊員やOVから聞いた活動中の悩み

この職種の先輩隊員に注目！

～現場で見つけた仕事図鑑

#0021

「観光」

分　　類：商業・観光
派 遣 中：11人（累計：369人）
類似職種：マーケティング、経営管理、行政サービス

※人数は2023年4月末現在

CASE 1

井上理恵（いのうえのりえ）さん
ルワンダ／2015年度4次隊・神奈川県出身

PROFILE
日本のホテルでコンシェルジュ、マカオ支店でゲストリレーションズマネージャーとして8年働いた後、国際協力の道に進む。海外協力隊の任期終了後は、スイスの大学院でホスピタリティを学び、ルワンダの学校プロジェクトに参画。現在は日本国際協力センター（JICE）に勤務している。

配 属 先：カヨンザ職業訓練校
要請内容：ホテルコースにて授業を担当し、インターンシップ受け入れ先のヒアリング調査、学校への情報共有を通じて授業の質の改善、就職率向上を目指す。

CASE 2

淺井香澄（あさいかすみ）（旧姓・山脇）さん
フィリピン／2018年度2次隊・愛知県出身

PROFILE
大学卒業後、システムエンジニアとしてJTBグループに勤務。旅行予約サイトの開発・運用を担当。「観光の第一線で活躍してみたい」と海外協力隊に応募。コロナ禍で緊急帰国した後、JICA帰国隊員奨学金事業を利用し、京都大学経営管理大学院観光経営科学コースに進学。

配 属 先：ペンゲット州ラ・トリニダード町役場観光課
要請内容：近隣の観光地バギオ市からの旅行客の流入を狙い、観光スポットの開拓、観光マーケティング、観光開発プランの策定を行う。

活動の基本

アイデア、行動力、知識を生かして活動 カウンターパートの力も大事な戦力に

「観光」職種の活動内容は、観光省や地方自治体で観光政策・振興を行うほか、観光協会などでマーケティングやプロモーションの企画・実施を行う。

また、大学や職業訓練校に赴任して、観光サービスに従事する人材を指導したり、日本人観光客対応のための日本語教育など、人材育成に関わることも多い。

現地のニーズと現状をしっかりと把握し、それに応じたノウハウやスキル、実務経験を提供することが大切になる。

CASE 1

本物に触れることがやる気の素 数多くの実習機会を自ら開拓

井上理恵さんがホテル勤務経験を生かして赴任したのが、ルワンダ東部県カヨンザ郡の職業訓練校。ホテルコースで学ぶ約100人の学生に、カスタマーケアやハウスキーピングなど、ホテル業務に必要な教科を教えた。

赴任3カ月後にカウンターパート（以下、CP）が退職し、突然、授業を一人で任されるという試練が襲った。しかし、程なく経験豊富なCPがつき、そこからは二人三脚で、さまざまな企画を実現させていった。

「ホテルに行ったことがない、エレベーターにも乗ったことがない、という学生が多かったんです。私自身、日本での上司から『現場を見て歩けば、お客様が求めるサービスがわかる』と指導され、実際に見て歩いたからこそ得られることがたくさんありました。だから学生たちにも本物のホテルを見せてあげたら、学ぶ姿勢が変わるだろうと思ったんです」

そこで企画したのが「ホテルツアー」だ。井上さんは、自ら首都の一流ホテルに出向き、学生たちにホテルを見学させてほしいと交渉して回った。結果、7カ所のホテルから受け入れOKをもらった。1回目はバス1台を借りて、学生20人と1日かけて四つのホテルを巡った。各ホテルでは、ランドリーやキッチンなどのバックヤードも解説つきで見学させてくれた。

「初めてのホテル体験に、学生たちは大いに刺激を受けていました。こんなホテルで働きたい、こんなスタッフになりたい、と働くイメージが初めて具体的に描けたようでした」

同時に近隣の小規模なホテルやレストランで学生が働きながら学べる「1日体験トレーニング」も企画。こちらはCPと共に交渉に回った。

「ホテルツアーに参加した子が1日体験トレーニングに参加すると、目的意識を持って働くので、働き方が違うんです。ダラダラ働いていた子も、それを見て良い影響を受けていきました」

首都の一流ホテルや近隣のホテル、レストランとつながったおかげで、インターンシップ先も一気に広がった。

「ホテルのインターンシップからそのまま就職できた学生もいて、ホテルのほうから学校に声がかかるようになりました。また1日体験トレーニングからレストランに就職が決まる学生もいて、就職率も向上しました」

井上さんが立ち上げた企画は、今も続いている。〝一流のサービス人材を育てたい〟という目標を達成するために、自ら行動を起こしたことが、要請内容以上の成果につながった。

CASE 2

デジタルコンテンツやバザーで観光地としての魅力をアピール

旅行会社でシステムエンジニアをしていた淺井香澄さんは、2018年、フィリピンのベンゲット州ラ・トリニダード町に派遣された。

同町は、観光客が増えている近隣の観光都市バギオからの観光客の流入を目指し、観光政策強化を急いでいるが、人材・資金共に不足しており、成果につながっていなかった。淺井さんには、観光スポットの開拓やデジタルコンテンツの制作支援が求められた。CPは観光課長で、日々の業務で多忙ながらも新たな観光振興の取り組みを模索していた。

「ここでは初めての隊員だったので、素材は全くない状態。まず写真素材や動画を撮ろうと、日本から持参した一眼レフカメラやドローンで観光地やレストランを撮ることから始めました」

山岳地帯に位置するラ・トリニダードは観光資源が豊富でプロモーションには有利だった。素材を集めてからは、ウェブサイトの作業に取りかかった。

JICAフィリピン事務所主催のバザーで、観光プロモーションもかねてラ・トリニダードの特産品を販売するイベントにも参加した。

「CPと観光課職員、インターンシップ生2人と首都の会場に出向き、全員が民族衣装を着用し、特産品のイチゴやコーヒーなどを売りました。イチゴは、開始約10分で完売し、日本円で約3万5000円の利益を上げました」

成功の要因を淺井さんはこう語る。

「現地の方のやり方、視点を取り入れたほうが物事がより良くスムーズに進行することもあります。特にフィリピンは縦社会なので、権限のあるボスの協力を得るのが一番の秘訣（ひけつ）です」

赴任1年3月でコロナ禍のため緊急帰国となったが、サイト構築は帰国後も現地とやりとりしながら進めた。

完成したサイトでは、淺井さんが撮りためた写真を豊富に使い、観光スポットやイチゴ農園、山岳民族の文化を反映したアート、魅力的な風景やアクティビティなどが紹介されている。

「現地の方でも編集が容易なワードプレスを用いたサイトで、観光課職員、インターンシップ生、地域の観光従事者の方々それぞれに編集権限を設定して、記事の寄稿を依頼し、皆で運用できるような形で提案しました」

残念ながら、パンデミックによる緊急帰国と観光業への打撃で運用までは果たせなかった。

「隊員には任期があり、私一人の力でできることは限られています。だからこそ、現地の方が自らできるようになることを優先すべきでした。また、私のほうも現地の方から学ばせていただいたことも多く、協力隊での経験を糧に現在観光を学修しています」

❶カヨンザ職業訓練校のハウスキーピングの実習で学生たちにベッドメイキングの仕方を教える井上さん
❷井上さんが企画したホテルツアーは全部で4回実施され、70人以上の学生が一流ホテルの現場を体験した

❸JICA主催のバザーでイチゴなどの特産品の販売と観光情報のPRを行う淺井さんとCPら
❹ラ・トリニダード観光の目玉「Stobosa Colorful Houses」は、山間の急斜面に立ち並ぶ家々がカラフルにペイントされている

Text＝池田純子　写真提供＝井上理恵さん、淺井香澄さん

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生

佐谷孝行（さやたかゆき）さん

（ホンジュラス／感染症・エイズ対策／2017年度3次隊・東京都出身）　大学卒業後、英イーストアングリア大学修士課程にて教育開発を専攻。感染症・エイズ対策職種で協力隊に参加し、教育現場の保健・ジェンダー分野で活動。現在はITエンジニアとして公立学校のICT教育事業に従事。

思春期世代への性教育はテーマを変えてわかりやすく

ホンジュラスで感染症・エイズ対策隊員として活動した佐谷孝行さんは、グラシアス市地域保健ネットワーク事務所に赴任し、現地の保健推進員や医師、看護師と共に、地域の保健所や学校を巡回し、虫感染症や若年妊娠、性感染症予防、健康維持や病気にならないための予防啓発活動を支援しました。

「感染症対策でも、HIV予防でも、他人事として受け止めている現地の人が多いため、目に見える形で、いかにその怖さを知ってもらうかが大切になります」

そこで今回は、佐谷さんから、「思春期世代への性教育のポイント」と感染を〝見える化〟した「ウォーターゲーム」のやり方を紹介してもらいました。

地域の公立高校や国立の中高一貫校で感染症・エイズ対策に関する出前授業を保健推進員と共に行った

思春期世代への性教育4つのポイント

授業に入る前のアイスブレイクにラジオ体操を取り入れたところ好評だった

ポイント1：アイスブレイクで気持ちをほぐす

アイスブレイクにお薦めなのが、立って行う「ラジオ体操」です。私が教壇に立ち、手本を見せて、スマートフォンとポータブルスピーカーで音を出して行っていました。全身の運動ができ、生徒の気持ちも適度にほぐしてくれます。英語、スペイン語、フランス語バージョンもあるので、ネットで探してみてください。

ポイント2：テーマはあらかじめ決めておく

性教育は5つのテーマに分けて、5回授業を行いました。テーマをあらかじめ決めておくことで進めやすくなる上、生徒たちも飽きません。現地の保健推進員のほか、必要に応じて医師、看護師にも講師を依頼します。テーマは学校保健冊子（※1）に沿って設定し、各担当者が内容を決めました。

授業での性教育のテーマ例

1回目	第二次性徴について
2回目	妊娠について
3回目	若年性妊娠について
4回目	性感染症について
5回目	ジェンダーについて

ポイント3：順を追って説明して理解してもらう

担当者が授業を行います。構成は〈原因→結果→予防〉という順番で話すことが大切です。例えばHIVについてなら、原因＝何が原因で感染するのか、結果＝感染してエイズを発症するとどんな症状が出るのか、予防＝感染を防ぐためにどうしたらいいか、という具合です。最後の予防の話は授業のまとめになります。生徒たちは発言するのが好きなので、どんどん質問を投げかけながら進めると、授業に集中してくれます。

ポイント4：避妊は性感染症予防にもつながなることを伝える

コンドームが単なる避妊具ではなく、性感染症予防としても重要な役割を果たしていることを伝えます。男性器の模型と本物のコンドームを使って、装着方法を見せます。男女共に最初は恥ずかしがりますが、「やってみて」と声をかければ、ちゃんと練習してくれます。実践的な性教育は、HIV陽性者が多い国では有効です。

佐谷さんが作成し、保健所に張り出したコンドームの使用方法を説明するポスターも授業と同じく具体的な表示になっていて、順を追ってわかりやすく工夫されている

※1　学校保健冊子…過去にホンジュラスの保健分野の隊員が作った大人向けの保健冊子を、同国の隊員が協力して学校教育用に作り直したもの。

Text＝阿部純一　Illustration＝岡村裕美　写真提供＝佐谷孝行さん

ウォーターゲーム

性教育授業のおさらいとして、特に評判が良かったのが、「ウォーターゲーム」です。直接関わっていない人からでも感染が広まるということを体験してもらいます。本来は水酸化ナトリウムとフェノールフタレインという薬品を使い、色が変わる反応を利用するのですが、そうした薬品がなくても現地でできる方法をご紹介します。

公立高校の保健室で「ウォーターゲーム」を行う生徒たちと佐谷さん

1 参加者を募る

参加者は偶数で6人から10人程度が望ましい。全員にコップの半分くらい水を入れて持ってもらう。この時、1人だけ水ではなく濃い色のついたジュース（※2）などをコップの半分まで注いでおく（この人をAとする）。

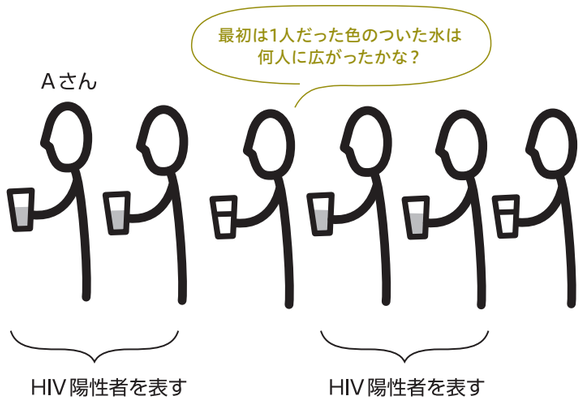
※2　事前に練習し、色が変わることがわかるジュースや量を確認しておくとよい。

2 ペアを作る

2人一組のペアになって、お互いに、自分が持っている水をスプーン2〜3杯分くらい、相手のコップに入れる。

3 別のペアを作る

先ほどとは違う人とペアになって、同じように水の交換を繰り返す。人数が多い時はもう1回、これを行う。必ず前とは別の人とペアを組むことが重要。



4 種明かし

ジュースが少しでも入ったコップの人と水の交換をした時、コップの水の色が変わったことを確認する。最初に色のついたコップを持っていたAの人が、HIVの陽性者で、水の交換は感染リスクのある行為（性交）を表すことを説明する。

▼

Aさんと自分が直接関係していなくても、パートナーがAさんと感染リスクのある行為をした場合、自分にも感染する可能性があることを伝えられます。

先輩隊員の

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

技術を身につけて社会に提供したい進路相談で見いだした自分の興味

今月の先輩

花田健悟さん Kengo Hanada
ガボン／柔道／2017年度2次隊、
2019年度9次隊・鹿児島県出身

就職先：
株式会社NTCテクノロジー

事業概要：ITシステムの運用マネジメントとネットワークの設計・構築・運用・維持管理および、各種サーバーの監視・運用・保守。

花田健悟さんの略歴：

1994年	鹿児島県生まれ
2017年 3月	大学卒業
2017年10月	柔道隊員としてガボンに赴任
2019年10月	任期終了
2019年12月	短期派遣でガボンに再赴任
2020年 3月	コロナ禍で一斉帰国
2021年 4月	JICA国内協力員となる
2022年 3月	JICA国内協力員の契約終了
2022年11月	株式会社NTCテクノロジー入社

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

小学生の頃から柔道に熱中し、大学卒業後も実業団で柔道を続ける予定だった花田健悟さん。ところが大学4年の秋に、先方の手違いで実業団入りがなくなった。協力隊に柔道の案件があることを知ったのは、その時だ。

「建設業界でODAの仕事にも携わっていた父は協力隊員とも関わりがあったようで、柔道を続けたいなら協力隊に柔道の職種もあると教えてくれました。いずれは指導者になりたいと思っていたので、迷わず応募しました」

大学卒業から約半年後、花田さんは柔道隊員としてガボンに赴任し、ナショナルチームの指導を中心に活動した。その後の短期派遣も合わせて東京2020オリンピック・パラリンピックの時期まで指導を続ける予定だったが、新型コロナウイルス感染症の流行拡大により任期終了を待たずに帰国。2021年3月に再赴任の話が持ち上がったが、実際に現地入りできる時期は不透明という問題があり、日本で社会人経験を積みたいとも感じていたことから、JICAの国内協力員として国内で働くことを選んだ。

この頃、将来のキャリアについて考え始めた花田さん。当初は、経験を生かして国際協力か柔道に関わる仕事を意識していたが、JICAの進路相談カウンセラーに相談する中で、気持ちが変わっていった。「カウンセラーからは『まずは視野を広げよう』と言われました。業種や分野を問わず、やりたいことや興味があることを挙げていき、自分に合った仕事を考えるという作業をカウンセラーと一緒に行いました」。

そこで挙がったのは、IT、建設、整体師など、業種の異なる仕事だった。いずれも懸け離れた仕事に思えるが、花田さんにとっては共通点があった。

「どれも技術職です。技術を身につけて、社会に提供することに興味があるのだと、自分自身で気がつきました」

元々プログラミングにも興味を持っていたことから、最終的にIT業界を選んだ花田さん。「将来は地方や海外で働きたいとも思いますが、今はそのために技術を身につけたいと考えています」。

1 協力隊時代 2017年10月～2019年10月、2019年12月～2020年3月

巡回先の一つで子どもたちと準備運動をする花田さん

ガボン柔道柔術連盟に所属し、首都リーブルビルの七つの道場・学校を巡回指導したほか、東京2020オリンピック・パラリンピックが近いこともあって特にナショナルチームの強化を求められました。ガボンの柔道のレベルは、アフリカでは中の上くらいで、国際大会ではなかなか上位入賞ができずにいました。しかし、私が指導していた選手がアフリカ大会で3位に入賞し、自分たちもやればできると彼らに示せたことは、私にとって大きな成果でした。2年間の任期終了後すぐ、引き続きの指導のため短期派遣で再赴任しましたが、コロナ禍で2020年3月に一斉帰国となりました。

2 JICA 国内協力員 2021年4月～2022年3月

帰国してからは、地元の市役所で事務のアルバイトとして働いていましたが、一斉帰国した隊員を対象とした1年契約の国内協力員の求人があることを知って応募し、1年間、青年海外協力隊事務局で、協力隊員をサポートする業務に当たりました。

3 就職活動　2021年10月～

JICAの進路相談カウンセラーに相談をしつつ、転職フェスに参加したり、転職エージェントに登録したりと就職活動を開始。エージェントから紹介を受けたり、フェスで見つけたりした企業約30社にエントリーしました。就職先をIT企業と決めてからは、ITに関する基礎的な知識を証明するITパスポート試験を受けたり、ハローワークが提供する職業訓練でプログラミングを学んだりもしました。

4 書類提出　2022年9月上旬

提出書類　▶履歴書、エントリーシート

履歴書を書く時には、進路相談カウンセラーに何度も相談しました。協力隊での指導経験については、いくつの道場で何人に指導したのかなど具体的な数字を出して説明する、自己PRは謙遜しすぎない、といったアドバイスは非常に参考になりました。協力隊関連の独特な用語を一般的な言葉に直すのも、普通の転職エージェントでは難しい部分だろうと思います。

5 面接　9月中旬～下旬

面接は2回あり、1回目は採用担当の部署の担当者、2回目は役員が相手でした。いずれも、志望動機や会社でやりたいこと、勉強していることなどを聞かれました。2回目の面接の1時間後に転職エージェントを通じて採用決定の連絡があり、エージェントからは、真面目な人柄とITの勉強をしていたことが評価されたと聞きました。

2022年11月1日　入社

現在の仕事

私の担当はシステムの保守・運用です。システムの中にウイルスが紛れ込んだり不正にアクセスされたりしないように、また、システムの更新などが正常に行われるように、シフトを組んで24時間体制で監視しています。夜勤が多く、まだ体が慣れていない状況ですが、健康維持のために柔道も続けています。趣味程度ではありますが、年に1～2回は大会にも出場したいと考えています。

就職先のNTCグループにて

後輩へメッセージ

進路を考える時は周りに相談することが大事だと思います。私の場合、国際協力か柔道の分野を漠然と考えていたのですが、進路相談カウンセラーと話す中で、自分がそれまで見てきた範囲内でしか選択肢を見つけられていないことに気づくことができました。自分以外の視点を持つことで視野が広がり、自分がどう見られているかわかりますし、新たな気づきもあります。私自身、それにより選択肢が増え、就職活動の方針も大きく変わったので、進路に迷っている人は、家族や友人、専門のカウンセラーに思いや気持ちを話してみることをお薦めします。

Text＝油科真弓　写真提供＝花田健悟さん

派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

▶オンラインの学び場「ジブンゴト大学」を立ち上げ

田村雅文さん　Masafumi Tamura

シリア／環境教育／2005年度1次隊・三重県出身

課題に取り組む人の声を共有する場をつくる

「他の人の問題について聞いたからといって、必ずしも共感や支援をしなければいけないわけではありません。誰かの〝自分事〟を聞くことで、自分が感じていることを声として出すきっかけになればいいと思っています」

２０２０年にオンラインで社会課題を考える場「ジブンゴト大学」を立ち上げた田村雅文さんは、考えと思いを確かめるように言葉を選びながらも力強い口調で話す。当時、コロナ禍で世界的にステイホームが求められる中、インターネットならば世界中の人が学び合うことができると考えて、各国で社会活動に携わる人たちの話を聞けるオンラインセミナーやワークショップを企画。そして「世界のタニンゴトをジブンゴトに」をコンセプトとした。

熱心な社会活動家のようにも受け取れるが、田村さんには「遠い国の出来事を他人事だと思うな！」と迫るような押しつけがましさはない。世界各地の人から学んで精神的に豊かになれる場を分かち合う、というスタンスだ。

田村さんは大学時代から世界の保健事情に関心があり、1年生でイラクを訪れた際、現地の医療・経済などの状況にショックを受けた。その後、英国の大学院への留学を経て協力隊に応募し、シリア初の環境教育隊員として活動したが、活動成果を振り返って消化不良な感覚が残った。「その経験がなければまったく違った人生を送っていた」と断言する田村さん。帰国後はいったん外資系フィルターメーカーに勤務したが、「やはり国際協力の現場に行きたい」と11年に開発コンサルティング会社に転職した。

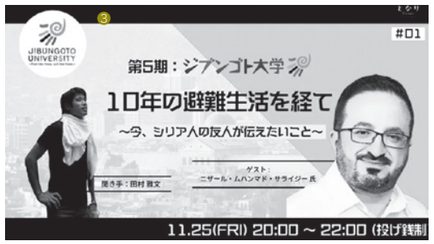
しかし、時を同じくしてシリアで紛争が勃発。現地の友人たちが心配になった田村さんは隣国ヨルダンを訪れ、シリアの惨状を肌で感じた。シリアのために何かできないかとヨルダンに拠点を移していたＪＩＣＡシリア事務所の採用募集に応募し、合格後、12年に妻子と共にヨルダンに移り住んだ。さらにシリア難民支援のボランティア組織「サダーカ」も結成。1日に何千人もの規模でシリア難民が押し寄せるヨルダンで、その実情とリアルな声を発信した。そして、持病や障害を持った人など、必要な支援を受けにくい人々にチャリティの寄付を届ける傍ら、日本国内では、難民が生まれる根本原因である戦争の終結を最優先にするよう各所で訴えるなど力を尽くした。

17年、田村さんは国際乾燥地農業研究センター（ＩＣＡＲＤＡ）に就職し、ヨルダンからエジプトに移った。「サダーカの中心的なメンバーの生活にも変化がありました。18年ごろから一部地域を除き戦闘が収まってきたこともあり、活動の今後を話し合い、21年をめどに解散することになりました」。

約10年間のサダーカの活動に「全精力を注ぎこんだ」という田村さん。一つの区切りが決まって虚脱感を覚えたというが、前後するように新しい展開が待っていた。ＪＩＣＡ事務所時代に知り合った協力隊ＯＶから、自身のオンラインイベントでシリアについて話すよう依頼されたのだ。それをきっかけとし、20年にイベントの関係者らと立ち上げたのがジブンゴト大学だ。

海外の紛争や難民問題に関わる人に話してもらうセミナーから始め、日本国内の課題に取り組む人にも幅を広げてきた。最近では、田村さんの隊員時代からの友人でもあるシリア人のニザールさんが避難先のヨルダンから登壇して10年に及ぶ避難生活での経験を語った。これまでにセミナーを32回実施し、累計の参加人数は７５０人に上る。参加者からは投げ銭などを募り、登壇者や運営を支えるフリーランサーへの支払いに充てている。

「住んだことがある場所が戦場になる経験をして、自分にしかできないことは何だろうと考えるようになりました。世界規模の紛争から、私が今まさに経験している子育ての場までさまざまなスケールの摩擦がありますが、目の前の人とのコミュニケーションを大切にすることが異なる考えの理解につながり、ひいては世界平和に関わっていくのではないかと感じています。最近はジブンゴト大学の参加者も固定化してきているのですが、誰に訴求するのか、〝ジブンゴト〟をどう追究するのかといったことを、私自身の中でもより明確にできるよう、地道な取り組みを続けていきたいと思います」



❶ダマスカス郊外、東グータの村の人たちとの一枚。校外学習で訪れた日本の学生たちを村で受け入れた
❷サダーカの活動で子どもたちと会う田村さん
❸ジブンゴト大学ではシリア時代からの友人にも登壇してもらった

ジブンゴト大学
https://www.jibungoto.net/

Text＝大宮冬洋　写真提供＝田村雅文さん

田村さんの歩み

1979年生まれ。

2000年、三重大学在学中に「日本イラク医学生会議」のグループ8名でイラクへ渡航。

1990年のクウェート侵攻に対する経済制裁下でしたが、バグダッドは思った以上に発展していて驚きました。イラク人学生たちとたわいない会話もでき、共通点を多く見つけられた経験です。

2004年、イギリスのブラッドフォード大学の大学院に留学。

専攻は国際開発学。実務経験のある社会人学生が多く、そのストーリーを基盤として主体的に学んでいました。自分にも彼らのようなストーリーが必要だと痛感した1年間でした。

2005年、協力隊に参加してシリアへ。

人の生活に近い場所で活動したいと思い、環境教育を選びました。寒暖差が大きい砂漠地帯の底冷えも経験し、戦災や地震で家を失った人たちの苦しさが少しは想像できるようになったと思います。

2007年、外資系フィルターメーカーに就職。

仕事のプライオリティのつけ方など、民間企業で鍛えられてよかったと思っています。ただ、利益追求が目的の組織でずっと働くイメージは持てませんでした。

2010年、結婚。
2012年、JICAシリア事務所で勤務開始。
サダーカを結成。

妻は私の協力隊時代にシリア事務所で経理をしていた日本人女性です。僕がヨルダンのシリア事務所へ行くことにも賛成してくれ、サダーカの活動も妻の理解と協力があって実現しました。

2017年、ICARDAに就職し、エジプトへ。
2020年、ジブンゴト大学の立ち上げ。

トルコ・シリア地震ではICARDAの同僚の家族や、トルコのシリア難民たちも被災しました。サダーカ時代の16年に発足させたシリア和平ネットワークでも被災者支援に動いていますが、目の離せない状況が続いています。

❶海と山の恵みが豊かなことが陸前高田市の特徴。漁の手伝いをするSETのメンバー　❷交流を深めることにより、地域の方々には生きがいを、学生には自分の可能性に気づいてもらう　❸グローカルプログラムで木の伐採の研修を受ける様子

待ってます、あなたを！
各界からのエール
From
特定非営利活動法人 SET

陸前高田市を拠点に地域と若者の交流を図りJICA海外協力隊グローカルプログラムに協力

NPO法人SET（セット）は、岩手県陸前高田市を拠点に、「まちづくり、ひとづくり、社会づくり」を理念に掲げ、地域に住む方々と外部の若者の交流の機会をつくり、地域住民の生きがいづくりや若者の学びをサポートしています。

私たちは2020年以降この地で、地産地消による地域内での産物や経済の循環をはじめ、持続可能な農法の開発等の取り組みを開始しました。こうした取り組みは、世界のローカルでも同じように必要とされていることだと感じています。

2021年からコミュニティ活性化の一環で、「JICA海外協力隊グローカルプログラム（派遣前型）」に協力し、これまで2名の方を受け入れました。

プログラムでは、コミュニティビジネスの運営サポートや地元住民との関係性構築をテーマに取り組んでもらいますが、陸前高田を舞台に、地域に入り込んで、地域にある課題を肌で感じることができる醍醐味（だいごみ）があります。

これまでの例では、生産者と野菜の卸しを一緒にしたり、生産物の購入者に配達に行ったり、また、地球・人・資源に配慮した持続可能な農園で、落ち葉と米ぬかで堆肥を作ったり、派遣先でのアイデアになるようなことも体験していました。

現役隊員の方々には、派遣国の地域で活動する大変さや難しさもわかりますが、ぜひ、諦めずに一緒に頑張りましょうと伝えたいと思います。

同期の隊員や、私たちのような団体とも情報を共有したり、励まし合ったりしながら、実践を学びに変え、次の世代に良い未来を渡していけるように、取り組んでほしいと思います。

岡田勝太さん
特定非営利活動法人SET理事
おかだしょうた●2011年に起きた東日本大震災をきっかけに、陸前高田市にボランティアとして関わり始める。15年に大学卒業と同時に移住。現在は陸前高田市を舞台に持続可能なライフスタイルをテーマにした学校「Change Makers, College」を運営。デンマークの学校と協業している。

Text＝阿部純一（本誌）　写真提供＝NPO法人SET

任地の思い出を聞きました。

あの日、地球の、あの場所で。

予想外尽くしのベリーズ生活

四国より少し大きな国土に40万人が暮らすベリーズは、メキシコとグアテマラに隣接する中米の小国です。派遣が決まった私は、治安の悪さや不便な生活をイメージして、身構えた気持ちで赴任しました。

ところが、派遣されたメキシコ国境近くのコロザルは、至ってのんびりした海辺町。主要都市のベリーズシティなどにはスラム地区もありましたが、コロザルは全体に明るい雰囲気で不安なく道を歩くことができ、思っていた環境と全く違っていました。

予想外だったのは治安面だけではありません。生活インフラも良好で、停電さえ一度もなく、IT系隊員では必須のインターネット環境や機材の不備もなし。バスもおおむね定時発車で、「普通に暮らせるやん！」と拍子抜けするほどでした。

良い意味で裏切られたコロザルでの日々でしたが、赴任からわずか4カ月のタイミングで、コロナ禍による一斉帰国が決まってしまいました。残念な思いを抱えつつも、お別れのために各所を回っていた時、もう一つ予想外な出来事がありました。

活動先の二つの小学校のうち1校は、生徒が平気で授業をサボったりする〝やんちゃ〟な学校だったのですが、そこで最後の挨拶をした私に、いつもおてんばだった生徒の一人が悲しそうな顔で「ちゃんと手を洗ってね」と何かをくれました。見れば、現地で配られていた手洗い指導のビラです。

妙な送り出し方もあるものだと苦笑しましたが、せめてもの気持ちだったのでしょう。別れを惜しまれるような関わりを持てたのは、派遣された甲斐があったと感じます。

Illustration＝牧野良幸　Text＝飯渕一樹（本誌）

森川真秀（もりかわまさひで）さん
ベリーズ／PCインストラクター／2019年度2次隊・京都府出身

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

AWARD

第1回 JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰の受賞者を発表

青年海外協力隊発足の日にあたる4月20日に、「第1回JICA海外協力隊　帰国隊員社会還元表彰」の受賞者が、JICA海外協力隊ウェブサイトで発表されました。この賞は、帰国後10年以内のJICA海外協力隊経験者で、国内外・公私問わず社会課題の解決に取り組んでいる方を表彰するものです。記念すべき第1回の受賞者8名は以下の方々です。

大　賞	徳島 泰さん（フィリピン/デザイン/2012年度1次隊）
アントレプレナーシップ賞	加藤菜穂（旧姓：梅谷）さん（ラオス/コミュニティ開発/2017年度3次隊） 木下一穂さん（ルワンダ/野菜栽培/2012年度3次隊）
地域活性化賞	奥 結香さん（マレーシア/障害児・者支援/2014年度2次隊）
国際協力キャリア賞	砂原遵平さん（マラウイ/コミュニティ開発/2014年度1次隊）
SDGs実践賞	平野耕志さん（ザンビア/村落開発普及員/2011年度4次隊）
多文化共生賞	牧 ちさとさん（ケニア/障害児・者支援/2016年度1次隊）
現職参加発展賞	日比野ともみさん（ヨルダン/音楽/2012年度1次隊、ヤマハ株式会社）

※今回は【特別実践賞】の該当者はなし。

RECRUIT

企画調査員（ボランティア事業）の公募が開始

2023年度第1回公募が6月下旬より開始される予定です。企画調査員（ボランティア事業）はJICAの在外拠点において、JICAボランティア事業を運営し、JICA海外協力隊の活動全般をサポートしていただきます。皆さまのご応募をお待ちしております。

募集期間（予定）：2023年6月下旬～7月中旬
募集人員：30名程度（仏語人材特に歓迎！）
契約期間：2024年2月1日、6月1日、10月1日より2年間

REPORT

「協力隊まつり2023～動き続けている世界へ～」を開催

広く一般の方々に向け、JICA海外協力隊を身近に感じ、さらに国際協力に興味を持ってもらうことを目的として毎年開催されているイベント「協力隊まつり」（主催・協力隊まつり実行委員会、共催・JICA）。今年は「動き続けている世界へ」をテーマに掲げ、4月22日、23日に新宿区のJICA市ヶ谷ビルのリアル会場とオンラインのハイブリッドで開催されました。JICA海外協力隊経験者が立ち上げた団体や国際協力に関連する団体など50団体が参加し、2日間で1300人以上が来場しました。イベントでは各団体の活動紹介やワークショップのほか、協力隊OVによる講演・キャリアセミナーなどが行われました。毎年本格的な味が楽しめると好評なJ's Cafeでは、ウクライナのボルシチ、バングラデシュのビリヤニ、リベリアのチェックライス&グレービーが提供されました。青年海外協力隊事務局では、来場者への募集説明会や個別相談会も実施。参加に関心のある希望者の相談に応じ、自身の経験を踏まえた現地での活動・生活の様子やJICAのサポート体制などを説明しました。

協力隊まつり2023のポスター

❶青年海外協力隊事務局による募集説明会の様子
❷青年海外協力隊マレーシア会のブース

クロスロード　［ 2023年6月号 ］

第59巻第5号　通巻687号
発行日　2023（令和5）年6月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株)　校正：佐藤智也

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

編集後記

JICA事務局：隊員めしのホットケーキ！ベナンOVの私も任地で作りました。でも、ベナンに蜂蜜があるとは知りませんでした。ご近所さんに蜂蜜をかけたホットケーキをご馳走したかった。意外と気づいていないことが身近にたくさんあるかもしれませんよ。（脇田雄気）

クロスロード編集室：派遣国と日本、両方の慣習を知った協力隊員だからこそ気付く「もやもや」。解決することは難しくても、これを共有できる先輩隊員とつながれたら気持ちも晴れるはず。そんな思いでこの特集を企画しました。ぜひご活用ください。　（千川美奈子）

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。　●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

JICA海外協力隊派遣現況

（2023年4月末現在）

現在の派遣国数
65カ国

（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	25	1
ガーナ	33	
ガボン	11	2
カメルーン	20	
ケニア	31	
ザンビア	6	
ジブチ	7	
ジンバブエ	11	
セネガル	10	
タンザニア	4	
ナミビア	7	
ベナン	11	
ボツワナ	16	1
マダガスカル	29	
マラウイ	19	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	23	1
ルワンダ	44	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	13	
インドネシア	8	1
ウズベキスタン	9	2
カンボジア	25	
キルギス	10	
ジョージア	4	
スリランカ	8	
タイ	17	4
東ティモール	9	
フィリピン	3	
ブータン	21	6
ベトナム	30	
マレーシア	13	5
モンゴル	15	1
ラオス	10	3

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
ソロモン	6	
トンガ	3	1
バヌアツ	3	
パラオ	16	3
フィジー	8	1
マーシャル		2

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	7	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	24	
チュニジア	15	1
モロッコ	4	
ヨルダン	26	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン				1
ウルグアイ		4		
エクアドル	9			
エルサルバドル	12			
キューバ		3		
グアテマラ	22	1		
コスタリカ	13			
コロンビア	6	2		
ジャマイカ	3	1		
セントルシア	10			
チリ	6	1		
ドミニカ共和国	17		8	
ニカラグア	7	2		
パナマ	4			
パラグアイ	25	3	2	
ブラジル			27	1
ベリーズ	3			
ペルー	19	2		
ボリビア	16	2	1	
ホンジュラス	10			
メキシコ	4	4		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中（男性／女性）	808（337／471）	62（51／11）	38（13／25）	2（1／1）	910（402／508）
累計（男性／女性）	46,735（24,703／22,032）	6,628（5,355／1,273）	1,583（611／972）	550（254／296）	55,496（30,923／24,573）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊

隊員めし

現地で作った日本食、日本で作る現地めし

ベナン

綿貫大地（わたぬきだいち）さん

ベナン／コミュニティ開発／2017年度2次隊・千葉県出身

大学を休学しザンビアで半年間ボランティア活動に従事。卒業後、渡英し大学院で開発学修士号を取得。社会人経験を経て、協力隊に参加。任期終了後、起業するため再びベナンへ。飲食店の立ち上げなどを行った後、2021年3月にAgri-Missionを設立、代表就任。ベナンの農家の収入や生活の質の向上に貢献し、農家の自立を促すことをビジョンに、野菜の直送サービスを行う。

現地で作った
日本食

「ホットケーキ」

任地では週に1度くらいの頻度で大家さんの家でごちそうになっていたので、たまには振る舞おうと、大家さんの子どもたちと一緒に作ったのが「ホットケーキ」です。食に保守的なベナンの人々に食べてもらうため、現地の人も知っている見慣れた材料で作れるメニューを選びました。一緒に作ることで工程を見て安心してもらえたこと、食べる時にベナン産の蜂蜜をかけたことで、喜んで食べてもらえました。ベナンにも小麦粉を使って砂糖を振りかけた一口サイズのお菓子はありますが、ホットケーキのような大きなサイズで蜂蜜を使ったお菓子はなく、新鮮だったのではないかと思います。

●材料

小麦粉	100g
卵	2個
砂糖	大さじ1
水または牛乳	25g
サラダ油か落花生油	少々
蜂蜜	お好み量

●レシピ

❶小麦粉をふるいにかけ、卵、砂糖、牛乳を入れて混ぜる
❷油を引いて熱したフライパンで①を焼く
❸食べる際に蜂蜜をかける

<編集室で再現した感想>
難易度 ★☆☆☆☆
達成感 ★★☆☆☆

確かにふわふわのホットケーキにはなりませんでしたが、手に入りやすい食材で簡単に作れます。ハムやレタスなどを挟めば食事用にも応用できるので、いろいろな地域で喜んでもらえると思いました。

<綿貫さんからのアドバイス>
現地でベーキングパウダーが手に入らなかったので、ふわふわとした仕上がりにはできませんでした。サラダ油の代用品として、現地でよく使われている落花生油を使いました。熱に強く香りやコクが出る油です。

中華鍋で作ったホットケーキ。ベナンの蜂蜜をかけて振る舞った

日本で作る
現地めし

「アタシ」

ベナンで日常的に食べられている主食に、トウモロコシの粉を練った「パット」と、赤インゲン豆や小豆のご飯「アタシ」があります。ベナンの料理は赤唐辛子を使っていることが多いので全体的に辛いものが多い印象がありますが、アタシにも赤唐辛子の効いたトマトソース「ジャ」をかけて食べます。ピリ辛感が食欲をそそります。屋台によって特にソースの味が違うので、ベナンに来たらぜひ食べ比べしてみてください。ただし、屋台で食べる時には時々砂が混じってジャリジャリするので、注意が必要です。

●アタシの材料（2人分）

赤インゲン豆	75g（お好みで）
米	2合
水	400ml
塩	少々

●ジャ（アタシのソース）の材料

トマト	2個（お好みで）
赤唐辛子	2本程度（お好みで）
にんにく	2かけ程度（お好みで）
玉ねぎ	1/4個程度（お好みで）
落花生油	少々
塩	少々

●レシピ

❶赤インゲン豆と米を洗って1時間以上水に漬け、ざるにあける
❷①に水を加え、少量の塩を入れて鍋でふたをして炊く。最初に中火で10〜15分程度、その後弱火で15分程度（水加減、火加減は心配ならふたを開けて確認し、水が足りなければ足して豆の硬さを確認してもよい）
❸ジャの材料（トマト、赤唐辛子、にんにく、玉ねぎ）をすりつぶす。玉ねぎはすりつぶせない場合は細かく切る
❹フライパンに落花生油を入れ、③を炒め、塩で味つけする
❺ご飯が炊けたら皿に盛り、④をかける

<編集室で再現した感想>
難易度 ★★★☆☆　達成感 ★★★★☆

米と赤インゲン豆を一緒に炊いたところ、米が炊けた段階で豆がまだ少し硬かったので、水を加えて豆がやわらかくなるまで火を入れました。今回は日本の粘り気のある米を使ったので、もち米のようなねっとり具合になりましたが、香り米などの水分の少ない米を使うと、仕上がりも変わるのかもしれません。ジャの材料をすりつぶす際、おろし金を使いましたが、玉ねぎのすりつぶしが難しく、玉ねぎはみじん切りよりも細かく包丁で切りました。ジャがあることで、全く違う味になり、味の変化が楽しめました。

<綿貫さんからのアドバイス>
アタシは、炊くというより煮るに近いのかもしれません。現地の方は、炊けるまで鍋の蓋を開けない人もいれば、水を注ぎ足しながら炊く人もいます。ジャは具材の形が残らないくらいまでにすりつぶします（現地では平らな石の上に材料を載せ、石ですりつぶしていました）。ピリ辛ソースが決め手ではありますが、アタシもジャもお店ごとに味が違うので、型にはまらず自分好みの味で作ってみてください。

レシピ・写真提供＝綿貫大地さん　Text・再現料理＝ホシカワミナコ（本誌）　Photo（再現料理）＝干川 修

共に作れば
安心して食べてもらえる
「ホットケーキ」

名前も味も日本人好みの
ベナンの日常食
「アタシ」

「イニャムピレ」と呼ばれる、ヤム芋から作る餅を作るところ。日本のきねと臼のような道具でつく

店の「アタシ」。左写真は大豆のチーズを添えた豪華版。「ジャ」に肉などが入ることもある

現在の仕事から。農家の新鮮野菜を販売するAgri-Missionの実店舗で

クロスロード 2023年6月号
2023年6月1日発行（毎月1回1日発行）第59巻第5号 通巻687号 編集・発行 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

❶ミャンマーで正装とされる鼻緒のついたサンダルを作る職人さん（撮影＝兵頭千夏）
❷市場への買い物で使われるプラスチックバスケット。プラスチックテープを編んで制作する（撮影＝兵頭千夏）
❸草木染をした糸で織ったテキスタイル

＼ウチのこだわり／

OB・OGショップ

ミャンマー各地の職人の手仕事を守り伝え 生産者の生活向上を目指し、ショップを運営

協力隊の任期終了後、ミャンマーのNGOに所属し学校建設を通じた地域開発を行っていた和田直子さんは、現地の人々から生活の困り事について相談を受けていた。「『きれいな水がない』と言われても、私たちのプロジェクトの予算ではすぐに水道を引いたりすることはできません。せめてコミュニティの収入を増やす手伝いができないかと考えていました」。

ミャンマーにはさまざまな少数民族が暮らしており、各地に伝統的な手工芸の文化があった。一方で和田さんが外国人目線で商品を見た時、買いたいと思う物がなかった。「ミャンマーはオーダーメイドが盛んな国です。村の職人さんに商品のアイデアを伝え、賛同してくれる職人さんに商品作りをお願いして売ることで、村の収入が増やせないかと思いつきました」。

そうしてヤンゴンに誕生したのが「dacco.（ダッコ）」だ。オープンから10年目を迎える現在、店舗にはさまざまな少数民族の織物、ロンジー（※）の布で作ったバッグ、植民地時代に伝わったタティングレース、手すき紙、漆器、籐籠（とう）、サンダル、翡翠（ひすい）や琥珀（こはく）のジュエリー、コーヒーなど、100種類以上の商品が並ぶ。どれも洗練されたデザインで、ヤンゴンを訪れる外国人旅行客や駐在員に人気の店だ。

「ホンジュラスで音楽教育に携わった協力隊員時代に、思いの押しつけになってはいけないことを学びました。今も職人の方々がやりたいことのサポートをする姿勢で提案はしますが、無理強いはしません」と話す和田さん。一方で安価な工業製品が増える中、伝統的な手工芸の価値を高めるため、商品作りに妥協はしない。納得いく商品ができるまでに数年かかることもあるという。昨年は故郷の鹿児島にも新店舗を構え、思いを共にするミャンマーの職人たちと手工芸の魅力を発信し続けている。

ヤンゴンのParami Road沿いにあるメインブティック。このほかヤンゴンのBogyoke Aung San Marketと、鹿児島市内に店舗がある

SHOP DATA

dacco.
経営者：和田直子さん
（ホンジュラス／音楽／
2001年度1次隊・鹿児島県出身）
ウェブショップ：dacco.myanmar
https://www.dacco-myanmar.com/

Text＝ホシカワミナコ（本誌）　写真提供＝dacco.

※ロンジー…ミャンマーの伝統衣装

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722
VEGETABLE OIL INK
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
ジャイカ JICA